# 川柳塔

昭和四十一年一月九日　第三種郵便物認可
昭和四十一年七月二十五日　印　刷
昭和四十一年八月一日発行　（毎月一日発行）
（第一一一号）

No. 11

八月号

国立公園 奥新和歌浦
・雑賀崎

国際観光旅館

うおまたろ
魚又楼

風光明媚な
海岸美を
誇る

TEL 和歌山(44)0431・1186(代)
大阪案内所 (641) 3564

暑中お見舞い
申しあげます

路川柳大会はおかげをもちまして大会でありました事を厚くお礼申しあげます。こんごともなお一層のご支援をたまわりますように。

故路郎先生の胸像の前で献花する柳人諸氏
（河野すゝむ氏撮影）

大阪市西区靱谷町
川柳塔社
電話番号・二〇二一一五九五番

# 今月のことば

## 中島生々庵

### ◎七月という月

◎この七月十日に、第一回の路郎忌が営まれた。ご生前中も七月十日前後に川柳まつりを毎年つづけられたが、それは勿論先生のご誕生日が七月十日であったからである。

◎七十七の喜の寿をすませた翌年の七月七日おなくなりになったのも、なにか七の字にかかわりがあるように思えてならぬ。

◎七という字がどういう性格を持っているのか、くわしく知るよしもないが、一寸指おりかぞえて見ても七夕まつりや七賢人、七曜日や七福人、お七夜七五三七転八起、七去七教七道七宝、七五調七味唐辛子に至るまで七の字にかかわるえんぎが、昔から沢山つたわっている。

◎その上私事で申訳けないが生々庵の誕生日が七月二日。幼にして死別した父の命日が七月十八日。七月という月は私にとっておさない頃から、ただごとでなく頭にこびりついてる月であった。

◎路郎先生と全く交渉のないはたち前後、東京での学生時代、浅草観音の四万六千日の縁日の記憶がはっきり浮びあがってくる。その縁日が七月十日。路郎先生のお誕生日である

◎それにしても土用入りから大暑、河童忌、天神祭と多彩な七月に、ことしから路郎忌が加わってゆくわけである。昭和十二年七月七日の七夕の日に日華事変がおこったように。

（七月五日記）

# 川柳塔八月号目次

題字・中島生々庵・表紙・直原玉青


今月のことば……中島生々庵……(1)

新聞柳壇の選
—同人特集—　服部十九平・奴田原紅雨・尼　緑之助・川岡霊眼子……(22)

川柳塔……(同人作品)……中島生々庵選……(4)

近詠と生駒から鰻谷へ……麻生葭乃……(19)

月見の宴も外人に解る……阿部佐保蘭……(46)

秀句鑑賞……(前月号から)……後藤梅志……(28)

川傍柳初篇研究……(三十八)……(20)
前田喜代人・岡崎重義・清　博美・藤井和雄・
川端柳風・故高須唖三味・丸　十府・岡田　甫・

ノモンハンの酒……(大陸放浪)……東野大八……(51)

武田信玄……(川柳戦国志・三)……冨士野鞍馬……(48)

いのちある句……戸田古方……(37)
追悼……湯室月村……(39)
**路郎忌川柳大会**……(38)
明治川柳と風俗……(十三)……奥津啓一朗……(50)
戸倉普天逝く……清水白柳……(52)
近作柳樽……菊沢小松園選……(30)
大萬川柳「腕」入選発表……清水白柳選……(60)
金泥集……麻生葭乃選……(57)
作句教室……清水白柳……(55)
★柳界展望……(薫風)……(62)
★各地柳壇……(文秋)……(64)
「ギタール」……奥谷弘朗選……(58)
一路集「身許」……大坂形水選
「汗」……臼井三林坊選……(59)
★編集後記……白柳・一三夫……(72)

# 川柳塔

## 中島生々庵選

豊中市　戸田古方

ひとにぎりになればこぶしにあるちから
しあわせは今朝もパッチリ眼がさめる

長男成婚

信じられ信じ合ってるとも白髪
娘がふえた息子がふえたとうれしがり
銀金ダイアモンドまでウエツディングマーチつづく
諸式万端滞りなくくたびれず
家計簿を二人がかりでつけていた
楢山節の意味がどうやらわかりかけ

帰宅して四句（療養所より月一回自宅へ外泊）

ただいまヘコンドオウチヘイツカエル
電子ツテナーニ母ちやん辞典引く
保育所へキヨウハアツチノスカートヨ
重症と見られたくないひげをそり

善通寺市新市長就任一句

新市政お大師さまも見てござる
今に見ておれ碁の本買うて来る
義歯入れて轡をはめた馬思う

善通寺市　岡田彰男

突然に視界が消えた気にもなり
みかんの皮が干してある縁側の思い出
ささやかな抵抗にはしやいでみる
風のうしろに立ってみたしと思う
冷蔵庫に頼り切ってるのも女
フォークの落ちた音に軽蔑がある
ひとりの夜　寝巻のえりの糊をもむ

大阪市　正本水容

兵庫県　遠山可住

待ちかねた孫を抱かしてくれぬなり

二十五年振り戦友の集い

握手まだとまどい二十五年振り
二十五年ガマの油をまだ憶え
想い出せぬまま酌み交す二十五年
万才を三度やつても去のとせず
二十五年振りの軍歌に気がそろい

新居浜市　安藤桂仙

妻外出とぼしき髪をなでつけて

失業して五句

失業の目に春斗のにくらしく
肩書の名刺も塵と共に焼き
年金が当てで老後をあわてさせ
捨て扶持で君子のように狭く生き
老夫婦手製の新茶で向い合い

大阪市　橘高薫風

蓮の花は一茎一花恩師の忌
路郎忌のビールの泡はあふれしめ
会わないでいても会うても邪恋かな
人品いやしからず守衛さん
七月よ雲海なして羊群

噴水に一人　わたしの青春か

大阪市　西出一栄

平安神宮にて

紫と白の菖蒲がこぼれそう

二条陣屋見学

からくりへ好奇心の眼々々

社員慰安旅行に同行二句

芦ノ湖のほとりで一声ほととぎす
七年の寿命を延ばす黒玉子
青空へとどけと口笛吹く若さ
螢光燈わたしの好きな色に見せ

大阪市　後藤梅志

鐘紡武藤社長に賛す

徹底しないからご破算という径輪
貧しくとも賽銭はちやんと入れ
手品師の鳩飛んで行くとこがなし
どつちが先きか死ぬまでというお弟子さん
読みかけの本ばかりなり老いたるか

夕照をまえに

美くしきうつくしきもの世にはあらざり

岸和田市　内藤きさ子

女心を心得ている薄情さ

枯れてなおあざみのトゲは人を刺す
電話でまで頼む仔犬の養子先
パートタイマーの奥さん売場ではすまし
ともかくも浴衣で舞台へ押し出され
ノッポのこけしは倒れたままのこけし棚

大阪市　不二田一三夫

大ジョッキ課長の顔をグッと飲み
ハンガーに服まで二人からみつき

高知へ旅して（四句）

竜河洞コーモリ一万怪奇めき
長尾鳥テープつかんだようにいる
土佐犬の元横綱は飼いごろし
はりまや橋坊さん単車で走りすぎ

岡山県　直原七面山

不思議さは死ぬ日を予言してた亡父
厳粛な事実へ親せき中が折れ
仁王の頬に涙で濡れたらしい汚点（しみ）

鉄道運賃値上げ（一句）

終身パスを持つて値上げへ驚かず
寡婦と言うからにこもつて愛拒絶

路郎師一周忌

兵庫県　小西無鬼

恩師未だそこに居りそな在ますよな
今日亦虫をおさえた酒の味
なめくじのあしの早さに驚いた
金儲けでもない忙わしさへも感謝
智恵のない時間待ちして乗り遅れ

出雲市　尼　緑之助

みみつちい話俺も同い年
海岸の校舎横では麦が熟れ

天橋立にて

天下の景なるほどなあと股のぞき
股のぞき肥えた女をあぶながり

城崎温泉

温泉の町の柳年期を入れて垂れ

青森市　工藤甲吉

ただぶらりぶらり駅弁大学出
どこか狂つている代議士音頭
縫うこともなく用のない糸切歯
プロレタリア正一合の店で飲み
死ねば行くところ一坪買い求め

門真市　福島鉄児

母の日の母を休ます術もなく
膝に手を置いて頑固な父であり

聞かされる方には痛いことばかり
心配をするなと受験の子がなだめ
お互に歳には触れず酌み交し

岡山市　服部十九平

レール二本交ることを許されず
鉄筋になつた母校が他人めき
寄附言うて来た郵便の不足税
頼りない男しきりにコネを言い
防犯灯避けて女は誰を待つ

ハワイ　羽佐間柳葉

はつきりと恋は終れり貧富の差
五十年愚夫と愚妻で睦まじく
商人の感謝は金にしてつもり
選挙した議員に増税されました
ホステスの恋は浮気な者とされ

大阪市　金井文秋

孫を預って（生後十一ヵ月）
二三秒立つた立つたへはやしたて
片言も言えぬに何をひとり言
いい顔が出来て何度も強いられる
マイペース食うてちよんから抜けられず
添寝するキューピー眠くないと云う

岡山県　浜田久米雄

ほのぼのと女の謎がいまわかり
弱点が死の間際までつきまとい
女房に相談をしてけりがつき
酔いざめの水へ女も手をのばし
こんこんと教えるめしの水加減

竹原市　杉原愛鳩

旅行から帰ればウソの様に晴れ
ギリギリのくらしお産の金を借り
靴二足ぬぎそろえて初夏の磯
重文の軒はかたむき草が生え
警官も交通違反も笑つてい

高槻市　若柳潮花

宿を出たついの浴衣の螢籠
せりなずな摘めばよめなのいとほしく
五月雨へ明けの逢瀬の草のいろ
たつたひとこと月へ残して時鳥
うつりゆく四季起き伏しを舞う扇

富田林市　川端東雲楼

亡妻追憶（五句）
納棺の母へ涙のうす化粧（娘達）
リンゴ汁分けてのもうよさらばさらば（自分）

永遠の旅路安かれ霊柩車（合掌）
よそものの墓標佗しい無縁墓地
亡妻あわれうすれはじめた百カ日

大阪市　福井野迷路

独り行く影を眺めて我恥じず
目をつぶりおきてる顔とねてる顔
お喋りを新緑黙つてきいている
名は千載宇宙の齢へ蠅の糞

倉敷市　田垣方大

社長でもお世辞の方を聞きたがり
とつくりをさかさにふるは　うるさがた
農業ときいてきたのに赤瓦
二次会をことわる薬袋見せ

防府市　長野井蛙

盤石も金のテコならすぐ動き
賃上げ賃上げ社会保障は頻冠り
どん底の女も思い出指にはめ
お地蔵さん建てたが事故は減つてこず

児島市　本田恵二朗

ついているらしい予感がはずませる
小うるさいけど便利です世話女房
チヤンスまた金魚すくいのごと破れ
たまの旅みどりの雨がつきまとい

京都市　大鶴喜由

足音を足音が追うこわい道
年金の自適どころか明日の糧
移転先雀も居ぬが蚊も居らず
利用価値なくなつた日が他人なり

堺市　冨岡淡舟

飲めそうな顔やと盃もつて来る
浪人の暮しに馴れて来た散歩
オジイチヤマ好きと言わせる玩具提げ
日曜も月曜もない日にあきる

大阪市　市場没食子

年寄りの冷水我執捨てなさい
娘二番目を産む
また女かいな電話へがつかりし
内　孫
武者人形背に内孫の投げ坐り
遮断機が今日も遅刻にしてくれた

大阪府　早川清生

思想の相剋戦つて庶民死ぬ
寝台車から見れば向こうも寝台車
詩人死んでも星一つ落ちる世でない

俺からの代を煙都の墓地公園

倉敷市　木村千容

流れ星ひとのこころのままながる
納得のゆかぬ動きにうごかされ
名物へあずみの蕎麦を一つ添え
打ちあけてみればなんでもない話

平田市　久家代仕男

爺婆さん身体三つに折つて植え
懐を気にして不味い旅の飯
オトボケが上手ぶん屋になり給え
日稼ぎに祝日法案腹が立ち

岡山市　江国幽谷

斥候のように一匹蟻が来る
急いでるらしいが矢ッ張り蝸牛
歩くから亀を子供が追うていき
ありふれた名前の子供が出世をし

新居浜市　近藤凡生

白砂の輝き吾が恋の讃美歌
スト倒産失業指の節ポキポキ
青葉青葉に負けてたまるか重い靴
箸止めてふと雨音を聞くも春

新居浜市　小林孝正

背むかれて君の黒髪まだ匂い
ずたずたに私を裂いて今日も生く
嬉れしい日撮れば写真も笑つてる
鍵つ子の淋しさ犬とひた走る

鳥取県　清水一保

衣食住たつて欲望更に増し
死の灰が降るとも見えず若葉萠え
追及でないと質問からみつき

大臣と同席して

選挙区が違い大臣そり返り

岡山県　大森娯句楽

結納へまさかの時の領収書
合槌を知り過ぎて問う宮田暉
冷蔵庫これから冷す音を立て

植樹祭行幸

尊顔が崩れる程に桜が咲き

玉野市　小谷仙山

よい時に帰えつて来たと雨の音
雨降れば雨の想い出干飯いる
町内の役皆引受け職が無し
大阪を引回すのも親思い

大阪市　長谷沢義英

北陸に旅して
ハネムーン車窓の母へ合掌し

養護学校に勤務して
静養児ゼロを念じて出勤す
喘息の子らを案じて今日も暮る
生き甲斐を感じて楽しいこの職場

奈良市　宮口笛生

病院満員生きているのがこわくなり
田植えする故郷にすまぬ無心なり
終列車今迄何をする女
終列車捨てた新聞ひろい読み

大阪府　西いわを

お客さんも流れ作業で持てなされ
此辺で疎遠にしたらと思う人
ゆつくり降りて忘れ物して来
枝振りは何うであろうと樹は繁り

出雲市　中川晃男

ほどほどに酒飲む婿で安堵する
値上げするまでに手紙を書くつもり
恐妻の顔切り換える廻り椅子
月賦未済の中でレジヤー費ひねり出し

高槻市　傍島静馬

見るだけでよいと云うのに買うてやり
へんくつを賞める言葉に気をつかい
失恋をした娘にしてはよく喰べる
ぼろ口へ石橋叩くのを忘れ

大阪市　本多柳志

日本ライン

木曽川の小雨を憎む檜笠
木曽川の美濃と尾張へ舟がゆれ
木曽川の巌とつつじに見下され
木曽川の澱む天守へ虹が立ち

芦屋市　丸川初甫

差し向い利子計算もする夜長
アイ・ジョージが唄えばエレキ静かなり
真正面にお守り貼つて検診車
夏座敷すだれの影は客の位置

大阪市　中川滋雀

妻の旅珍らしがられて雨となり
水加減聞くの忘れた妻の留守
煙草屋の飯に噛み噛み商われ
古時計我が家の歴史見てた音

青森県　木村涼人

倍増の手もなく生活きりつめる

どうせ出す寄附なら笑顔添えてやり
百姓に気がね涼しさ賞めそびれ
郵便料上り愈々筆不精

香川県　三井酔夢

唯物に傾きふんぎりつけた恋
正座して妻切口上で妬心みせ
妻はもうつかず離れず趣味に生き
モナリザの微笑浮気を聞き流し

笠岡市　木山遠二

万病の薬無病へすすめられ
万病の薬効きめをすぐ見せず
としよりの今日をどうする気か朝寝
日日好日招かなければ誰も来ず

熊本県　有働芳仙

岩蔭の二人を波がのぞきに来
いいこともあるサと金は貸さなんだ
奥の手と云うセールスの低い声
その辺を歩きましょうか魚心

京都市　都倉求女

平和とは遊んでる人を見るテレビ
男手が荷造りするよに木綿針
賞金を他人の空似だけで呉れ
バス停がわざわざ水の溜るとこ

大阪市　山川阿茶

足腰をきたえきたえて癌で死に
スレスレに汚なく儲けクラブ振り
人様の金で威張つて銀行員
洗濯屋の妻銭湯で足袋洗い

大阪市　石倉旅風

叱られている児の方にある理屈
独り来た意識起さす中之島
ホーほたる冷たい恋に焦れ死ぬ
還暦に終幕の析が一つ鳴り

大阪市　中島小石

元女姓などと老婆のかしましく
母の日へ子のプレゼント胸あつし
つまづきへ心のしみの消し切れず

京都市　松川杜的

書架楽し思い思いにプラモデル
おはなさん見るよに台所切り上げる

妙喜庵を訪う

国宝と云う茶屋の壁が落ち
一息を亀には亀の申し分

泉大津市　高津徹也

耳もとで孫がささやく夕涼み
疲労困憊が公園から帰り
不器用がこの世に通る職もあり
貘となりける悪友を静観し

倉敷市　野田素身郎

水爆によどれた雨で詩にならず
旦那来ているらしママが店に出ず
梅雨もよし相合傘の日が続き
物分りの限界金までは出さず

大阪市　水谷竹荘

ドック入りしてまで病気さがす気か
先輩と深い仲とは知らず惚れ
団体へまたかと猿は疲れたり
しあわせはまだ叱られる親が居る

守口市　羽原静歩

ぬれぎぬも五選となればもみ消され
会計課余技のないのを買われとり
ゆれるだけゆれて松代住んでおり
眼帯をはずして深い秋の空

愛媛県　村上旭童

無口でも通り短気でも通り
お寺へは寄附する金をもち合せ
酒豪もう申訳けなく飯にする

伊予大洲にて

肱川の螢見つけた川下り

大阪市　桝本蕗児

アメンボーたまにはもぐつてみたかろう
ハイキング父母をかばえる程育ち
お茶たてて夫婦で向う日曜日
鈍行で一日旅をしてみたい

高槻市　辻白渓子

定年のあとは実家の職が待ち
国宝の茶の間を襖間絵で仕切り
末席の意見はメモにさえならず
仕合せが過去にあるから愚痴にされ

岸和田市　植山武助

ウソウソウソ二十才の恋がむさになり
鈍行で残り少ない春を行く
二の舞を踏ませたくない子を叱る
子に頼る夢を流して終い風呂

大阪市　宮地双楽

栃木県烏山に和の普及の為同地に旅して（一句）

和の色紙生きて嬉しい烏山

行き先も決めて余生も又楽し
お先きとも云わで竹馬の友は逝き
名園の苔も時代のさびにおい

加賀市　木村一路

紅一点男のような口を利き
鍵つ子の孤独十円握りしめ
女房の酒量を知つてから酌がず
大臣をけなして馬の合うた酒

鳥取市　河村日満

金婚の旅世話役がひとり付き
録音へ老いあらそえぬハーモニカ
知つている曲へ園児の皆唄い

名古屋市　吉田水車

路郎忌を迎えて

みんなして若木ささげん雲の峯
あとのない土俵に立つたわが姿
雨毎に戸樋のいたみもままならず

岡山県　田村藤波

吟行に参加

新緑や強者共の勢揃い
男気を出したばかりに払わされ
何事も考えずに寝る夜が欲しい

下関市　国弘半休

買収の金が切れれば敵味方
長い耳たたんで蒸兎オリになれ
孫の手が段々強く肩たたく

島根県　藤井明朗

停退の筆無精など言うとれず
都会の子帰えれませんと農繁期
葉桜の静けさに来て物思い

大阪府　谷沢好祐

開けるのにコツが要ります我が家の戸
経験を若い学卒スツと抜き
日雇いにふえた祝日邪魔となり

鳥取県　森田布堂

来客にあわてて入歯はめて出る
カラにしたリツトル瓶を振り上げる
陽の恵み受けて金魚は初夏のもの

伊丹市　小川静観堂

地球よりの使者月の砂漠でお待ちかね
明治生れ消えろとまでは言い切れず
どのへんがよかろうか夫婦の定年制

枚方市　宮川珠笑

送らせて降りた車を振り向かず

気前よう買うて不渡り出してなや
テーブルで飲んでいる間のフェミニスト

小松市　馬場魚山

混浴も自然な線が区別する
眼に見えぬものに追つかけられて日々
葉ばかりが大きくなつた柏餅

竹原市　山内静水

折角の親切エッチとは無礼
いい知らせありそう謎がとけはじめ
弱点を突かれペースに巻込まれ

高砂市　吉原紅月

地下足袋を脱げば土方の白い足
昼寝する頭は同じ方へ向け
酒くせを知つて居るから酌ぎに来ず

小松市　関戸宗太郎

参観日ダイヤが光る位置に立ち
甘党へ課長が酌いで嬉しがり
示談屋のおつしやるとおり腕を吊り

児島市　伊丹阿喜良

岡焼きをして真実を口にせず
日曜を雨も待つてたように降り
半分に聞いても腹の立つ話

大阪市　宮尾あいき

百合の花此処が花屋と云う薫り
鈴蘭の使命果したつかれ見せ
つながれて猫長雨へ泣き続け

倉吉市　奥谷弘朗

気安めに縁起かついで見るも年
オープンを少し持つてる相場欄
精一杯生きて弱点なぞ見せず

岡山県　横山一声

天気予報あてにならぬがあてにする
田植する背を観光バスが過ぎ
西瓜の種蒔く頃西瓜売つて居り

富田林市　岩田美代

一代の努力あつさり逆と言う
贅沢な愚痴がひるねのじやまに来る
うつぷんを叩きつけてる表書

下関市　桜川不水

赤い恋ポストは知らぬ顔でのみ
アンテナは春の雀へ恋を借し
心とは別な顔刷く三面鏡

愛媛県　渡辺暁童

サロンパス婦唱夫随のはりどころ

知らぬから反対出来る若い人
桃桜よりはとほめる藤あやめ
西宮市　若林草右

火除け札お返ししますお大師さん
いびきかいて学会でねる不眠症
スリップする程スピードよう出さず
米子市　石坂新雪

玄関へ蛙が来てる田植どき
小金だけ数える妻になつて居り
金づちのちび御先祖のままでよし
宝塚市　小畠無聖

綻びを見かねた針の糸切歯
若い歯がパリパリ噛る小気味よし
披露宴にて
花嫁の横は両親気をつかい
大阪市　天正千梢

朝顔のように夕方疲れ切り
生きている証拠空気のうまいこと
わびしさは子無き初老酒がすぎ
松江市　柳楽鶴丸

絶対に嘘だと妻は信じきり
退院の日を心待ちにする自炊

海の上にも住宅が建ちならび（二十一世紀の夢）
大阪市　大坂形水

アパートの狭さへ次の子が近い
里で生むことにしている2DK
ゼット機に乗る決断に時間いり
防府市　弘津柳慶

単身赴任浮気どころかごろり寝る
銀婚式やつと模造の指輪買い
課長今日むっつりとして印を捺し
大阪市　米虫一乃字

ビヤガーデン止めてクリーム提げて去に
野暮な客千円呉れたを恩にきせ
青空へ妻にあつた若い唄
大阪市　室谷鉄舟

無精髭立派にのびて剃り惜しみ
先生と云われ清貧甘んじる
颯爽と来て特価品買うて去に
岡山県　藤原秋月

代書屋も怒つた気で書く抗議文
すれ違うバスの美人を振り返り
不眠症とは泥棒さんも知らずに来
大阪市　今西章雅

美しい月もほろ酔いついてくる
一握り砂をかぶせた骨納め
しくじつてホイホイホイと照れている

今治市　越智一水

女だとわかるブザーの軽い音
過去は過去きかない主義でいる後妻
やりくりのつかぬソロバン胸に抱き

加賀市　野村味平

点滴を見守る夫に気のゆるみ
耳朶を突く師の叱咤がまだ残り
骨壺を洗う掌に山縞蚊

加賀市　大山雅城

ほめられた花一輪を差しあげる
内緒話声をひそめて誰も居ぬ
八十歳ついに不一で了るかな

高知市　川竹松風

三回忌ここらで故人忘れられ
共稼ぎ倖せそうな耕耘機
意見するのに一本つけてやり

加賀市　那谷光郎

言い負けた夫の余噴が猫を蹴り
駄洒落など聞きたくもない眉のしわ
保険金まぶたに浮べ事故に泣き

神戸市　仲どんたく

要領の悪さに徹し文化財
牛若のように蚤めが跳びまわり
飲めるうち飲んでおけよと癌の友

大阪市　河井庸佑

勉強をしてると思えば旗をふり
宴会になくてはならぬような人
きようもまたママの気にいる点取れず

出雲市　原独仙

街路樹の埃りにまみれたまま黙し
よくはやる店のマダムのアイシャード
始業ベル悪魔が呼んでるように聞き

鳥取市　藤本礎山

御神馬の背にのるものは御幣だけ
御ゆつくりと云つて敬遠外出し
人間の弱さが贈答品を買い

福岡県　太田湖平

癒えて来る慾な事ども言い乍ら
口上手頼りにならぬ人に見え
お化粧が崩れるがなと泣きやませ

大阪府　佐藤甘草

あいさつは代理ばかりが出席し
休日も家庭奉仕の亭主らし
旅に出ても女は編物したいなり
岡山県　池田古心

螢狩り今夜も昨夜の場所で逢い
田植だけ済ませば米はとれたよう
兵庫県　河原みのる

泥足のひるね米価をかんがえず
口づけを待つているよなストロベリー
山口県　安平次弘道

ラッシュにも職にも馴れた子の便り
夕涼み妻も付き合う中ジョッキ
姫路市　隠岐不酔

太陽から一度来てはと言うたより
呉服屋の丹那洋服着て御座る
京都府　西村句楽坊

すかんのも有ろうが地蔵墓で待ち
子を死なせ女未来を信じ出し
高槻市　山田季賛

育つひな電気で生まれたとは知らず
どんこうで行く団体は高が知れ
堺市　高崎雄声

鉢巻をすれば給料はね上り
公害は恐いとチユンチユン雀ども
三次市　和泉松風

紅燈の河面に浮ぶ鮎解禁
アベツクへ倖の影もついて行き
兵庫県　大江秋月

非常口まずたしかめて旅の宿
二人の子ならべて爪を切つてやる
鳥取県　渡辺乱坊

酒の顔鏡で見ろと押しつける
笑われて笑えば痛いとこ疼き
大阪市　福井多蘭子

黒い髪自慢が見付けた二三本
氷点までつくした善意ふいとやめ
加賀市　細呂木魯木

妻子ら笑うがクイズ今日も出し
狂信の心理狂信だけが知り
★
菊沢小松園

馬耳東風他人の言にかさぬ耳
保護願に追つ駈けられて死を急ぎ
それなりに親が案ずる程で無し

凹凸の凸ばかり出る老夫婦
気象台思う通りに雲が出ず

中島生々庵

やつと一つ越した峠の雲の峰
老骨に粉骨砕身とはきびし
近火見舞ですよと友の遺書を読む
ぴんぼけを長寿の芽出たいものとされ
脳軟化症にもちよつぴり嫉妬心

松江梅里

雪月花シーズンオフの知らぬ古都
初心者歓迎などとあんじようカモにされ
かけおちもしかねまじきに父も折れ
子から手が離れて孫を持ち込まれ
インキ壺伝い歩きの子を逃げる

清水白柳

化粧せぬ顔を八百屋にたずねられ
手の甲の働く筋を見つめたり
無職だが家賃で食える程は持ち
日曜は子供がひるねなどさせず
宗教を気まぐれという目で見られ

川村好郎

釣堀に立つ辛抱は持つており
歩く恋語る恋緑の茶臼山
不足きりなく喜びもきりがなく
女傘借らずにすんだ雨上り
腰掛けぬ老人の意地にさからわず

北川春巣

日曜大工道具一式相そろえ
教養番組テレビやつぱり二台いり
アパートをわざわざ線路わきへ建て
車窓からなるほど三ちやん農業や
「開け胡麻！」いわんでも開くドアに立ち

西尾栞

解つちやいるけど五十八才如何せん
コンサルタント割り切りなさい割り切りなさい
せせこましいとこでうめいもの食わし
今気がついたような御挨拶
拾い屋に好き嫌いがあり松屋町

若本多久志

配給米まだまだ戦後が続いとり
人間がまだ出来てない腹を立て
プラン　ドウ　チエツクさり乍らさり乍ら
イイジアナイと団蔵の死を讃美
　アイバンク登録
老醜の眼球乍らと登録し

# 生駒から鰻谷へ

—中島生々庵先生—

麻生葭乃

一昨日は突然にお邪魔いたしまして、おてまをとらせました。

おはなしの胸像は今月中の日曜日に最後の荷物を生駒へ運ぶ時に一緒にこちらへ運び、私の部屋へ置くことにいたしました。

新しく求めました仏壇は万代の家へ残し、一歩（註・令息）にまつらせます。お宅から帰る途中で思い出したのですが、マンガ家は種瓜平氏でございます。頭の血管にコレステロールがたまっているのか、近頃はちょいちょい親しい人の名さえ思い出せないことがあるのです。七十の声がかかればいくらきばって見ても駄目でございます。

作品展のおあずかり品は郵税のあがらぬ六月のうちに万代へ帰って送り返えす積りです。いつまでも私に責任がかぶさっているようで重荷を感じます。奥さまへよろしく、不二田さんへも。（六月六日着便）

## 近詠

麻生葭乃

泡と目高挑む姿もなく流れ

青は青だと心の中で云うておく

山の句碑しげる山椒の実も青く

梅雨空に町の半鐘はぬれたまま

すり足のすみとりで行く水すまし

みんなの暮しが明るくなる
セキスイのプラスチックス
積水化学
本社 大阪市北区宇是町1

# 川傍柳初篇研究（三十八）

前田喜代人　川端柳風
岡崎重義　故高須啞三味
清博美丸　十府
藤井和雄　岡田甫

413　毒薬へんじ明らかに顔をミせ　五鳥

**藤井**＝とかく女房が美しいとオーバーワークで身体の毒となり、亭主は遂に腎虚となる。こんな世間の噂をよそに、知らぬ顔しながらますます美しい女の顔をうるさい近所の人々が「へんじ明らかに顔をミせ」といったのではなかろうか。「明らかに」でいけしゃあしゃあとした美しい顔と思う。この解自信なし。

**川端**＝かこい者が正妻の位置についたとでもいう意か？よく解らない。「毒薬へんじ」では文句取か？

**高須**＝三面子先生は「御家騒動が治まり目出度し〳〵」と言っているが「口に苦い国家老」が、なぜ「毒薬変じ」となるのか説明されていないので、そのへんがはっきりせぬ。「明らかに顔を見せ」たのが、その毒薬だったと取れば、伊達騒動の仁木弾正あたりか？

**前田**＝「毒薬変じて薬となる」「毒薬変じて甘露となる」の訳はよく知られている。句意はいろいろとれるが、あらそいなどして、毒薬をのんだような顔も、何かのきっかけで仲直りしたあと、良薬をのんで治ったような明らかな顔になったことをいったのではなかろうか。またこの諺は、狂言等のせりふに使われることが多いのが効果的といわれているから、当時の何かの事件の文句とりかもしれない。

**岡崎**＝毒薬のお妾が変じて、晴れて正妻に直った。

**清**＝何かの事件を詠んだ句であろう。

**丸**＝謎句解の鍵は毒薬。この毒薬は堕胎の薬ともなる水銀（鏡とぎに用いる）。とすると解の要もあるまい。毒薬変じて顔をはっきりと映し出す鏡面とする。まか不思議……。

**岡田**＝丸先生説、ご明解。敬服。

414　呑むかして潮ハ内儀きつゐ事　菅江

**川端**＝潮は、潮煮の略称で、鯛の吸物料理の名であるが、「呑むかして」がわからない。

**高須**＝「呑むかして」は「呑むんだろう」で、「呑む口で」と同じこと。だからこの句「呑む口の内儀で潮が上手なり」でこの女房、自分が飲めるので、何かというと潮を作る。だから、おのずとうまい潮が出来るであろう。

**前田**＝「呑むかして」は「呑むからして」であるが、意味は高須説に賛。

**岡崎**＝不詳。どうして内儀に「きつい事」なのか？

**清**＝「潮」は「潮汁」で、魚介物を塩味

で仕立てた吸物。淡泊なところが喜ばれ、鯛の目玉が第一に推される。「きつい事」は「きつい味噌」と同意で、非常に自慢するの意ではなかろうか。従って句意は高須説プラス前田説のように、飲める内儀は、潮汁料理がうまく、それをまた非常に自慢にすると解せられるのだが。

**藤井**＝「呑むかして」は「呑むからして」で、「きつい事」は、ことうるさい、ことやかましい、通り一辺でない。即ち、酒呑みなので、あの細君は潮料理の作り方に、註文がうるさいとの事。

**丸**＝高須説の如く、飲む口らしくみえてここのおかみさんの潮料理の加減は、すばらしくよいと解す。

**岡田**＝今一手、一語々々の説明が欲しい。「呑むかして」のカは疑問のカである。呑むかしてを、文法的にハッキリ云えば「呑むのだろうか、それで……」あるいは「そのため……」となる。江戸時代の「きつい」には、数義がある。(1)えらい。(2)非常なまた、大した。(3)適切（現代語でズバリそのもの）などである。句解に当たっても、句のキツイが、そのどれに相当するかを考えねばならぬ。それでこの句解は「イケる口なんだろうか、あそこのお内義さんのウシオと来ちゃあ、大したもんだぜ」という意味である。

415　**ひんな兄弟を薮入見て咄し　嵐弓**

**川端**＝兄弟は、ここでは曽我兄弟か。町家の雇人が暇を貰って親元に帰り、主人に見せてもらった曽我兄弟の芝居を咄しているものか。いい雇人で親も安心したことだろう。

**高須**＝薮入り子同士が、吉例曽我狂言を見て話しあっている。という句と思う。

**前田**＝柳多留に「曽我祭するから芝居金がなし」（六・3）があり、曽我の貧の掛け言葉がある。これは「鬼の目に涙を流す曽我の貧」（一〇・32）からきていると思うが、曽我兄弟の貧乏であったことは余りにも有名である。薮入りの同士も恐らく貧乏であろう。

**清**＝盆の斉日の芝居見物。

**藤井**＝あらうこと曽我の初日が金づかへ（五〇4）

宮芝居如何にも曽我が貧に見え（拾九4）従って前田説に賛。また曽我狂言は正月興行であるから、清説の盆の斉日ではない。

**丸**＝高須説十前田説賛。曽我の貧乏は川柳の一つの約束。この薮入りは藤井説の通り正月の薮入り。

**岡田**＝曽我の貧乏は「曽我物語」から見え曽我狂言でいよいよ喧伝され、丸先生がいわれるように、古川柳では、貧乏＝曽我兄弟……の約束となっている。

416　**鶏を御用一トはしくってミる　五扇**

**川端**＝「御用」は酒屋の丁稚のことで、諸家の御用を聞き歩いた。たまたま炊事の時間に御用聞きに廻って、鶏の味見をさせられたものであろう。

**高須**＝「一箸食ってみる」だから、馳走になっているのでなく、毒見させられている感が深い。「樽拾い鶏しめた訴人をし」（四・34）の句より、その手前に一箸食わされたか？

**前田**＝深く考えずにそのまま素直に解してよいと思う。

**清**＝御用の年齢（非常に幼い）及び立場から考えて、主人にかくれてのつまみ喰いではないかと考えている。

**藤井**＝御用だから録なものを食っていない、従って鶏肉は珍らしいのでかくれてのつまみ喰いの清説に従いたい。

**丸**＝「一箸くってみる」で、この御用どうやら鶏をしめるのに一役買ったらしく思われる。

**岡田**＝まあ、そんな所か。

# 売れる川柳

服部十九平

句会や柳誌の選では、その投句者が概ね個定しており、またその発表された句報なり柳誌を見るものも個定されているのが普通である。新聞柳壇となると応募者が常連の他に毎回新しい人が出てきて、中には冷やかしや一寸した物好きも混っている、そして発表された新聞は、句報や柳誌と違って、発行部数が比較にならぬほど多い、その多い読者の何パーセントが果して川柳を読むかは疑問だが、句報や柳誌とは、より広範囲の人々に見られることはたしかだ。句会や柳誌の場合は川柳仲間の見せ合いであり、新聞柳壇の場合は、社会一般への公表である。そこで句会の場合や柳誌の選をするときと新聞柳壇の選をするときとはどうしても調子が少し違ってくる。句会や柳誌の場合は専門的な選、新聞柳壇の場合は通俗的な選になると言えるのではあるまいか、専門的な選とか通俗的な選とかいう言葉はおかしいが、出す人、見る人の層に違いがあるのだから、私は自然こうした選になると思う、専門といい通俗といっても、決して通俗を「いい加減」と同意語に使っているのではない、より分り易く、より素人向きとでもいう意味である。

私がこう言うと、新聞柳壇の選者がそんな考えでいるから、川柳が何時までも、短歌や俳句より低級だと見られ、マスコミに文学として取扱われにくいのだと非難されるかも知らないが、柳人相手の場合と一般相手の場合とではこの相違はあっていいと思う。

川柳を一般に普及するには、分り易いよい句を選んで世間に見せなければならぬ、その見せる方法は媒体であるマスコミによらなければならぬ。そして富士野鞍馬さんがよく言われるように「売れる川柳」にしなければならぬ、新聞柳壇はこの「売れる川柳」の市場である、新聞柳壇の選にはこの心がけが肝要だと思う。

私は現在産経新聞岡山版の時事川柳の選をしているが、売れる川柳として買い手がつくどころか、ひどい罵倒を浴びせられたことがある。編集者の注文で選者の参考吟を載せというのでその週のニュースを取扱った時事吟を三句書いたところ、匿名の投書が来た、参考吟として掲載された選者の作品は何だ、あんな詰らぬ句を得々として書き、柳

歴の古さの上に胡坐かいてる選者面こそ唾棄すべきだというのである、いい反響ではないが、力をこめたこの反響を私は有難く頂載した。そして新聞読者が柳壇へもこうした関心を寄せてくれさえすれば、売れる川柳への期待も持てると思った。

以前夕刊岡山新聞の柳壇の選をしたが、これは月一回で雑詠であった、時事川柳とか雑詠とかよりも新聞柳壇では課題吟の方が、魅力があるようである。朝日の岡山版では毎週課題を出して日曜日毎に発表しているがその投句者は産経よりもはるかに多い、そこで朝日の常連投句者に「朝日には出しサンケイには何故出さぬか」と尋ねてみると、「毎週課題が出され全没者も非常に多いので日曜日に新聞を見るのが楽しみだ、全没になるとこの次にはとファイトを燃やす、日曜なのでゆっくり入選句の吟味も出来る、サンケイは火曜日発表で課題もないのだからどうしても朝日の方へひかれてサンケイには御無沙汰になる」と言うのである、これは新聞柳壇として考えなければならぬことと思う。

以前NHKのローカルやRSKが放送川柳をやっていた頃私もその選評を担当した、放送と新聞ではその発表要領が違うので、その披講には大きな相違があった、文字で現すのと声で現す違いがあり、受ける方も目で見るのと耳で聞くのとの違いがある、新聞は何時でも読めるが、ラジオは聞きのがしたらそれでおしまいである、従って新聞よりもラジオの方が一般に応募者が少ない傾向にある。

新聞にせよラジオにせよ私はマスコミ柳壇は「売れる川柳」の市場だとして商魂（？）逞しく選評すべきであると思う。

（産経新聞岡山版時事川柳選者）

# 新人の登竜門

奴田原紅雨

私たちは、柳祖からうけついだ歴史をせおって、みずからの時代を生きていくべく運命づけられている。川柳という畑に育った私たちが、これからの私たちの生きかたを正しく方向づけるために、先人の残した遺産を探求し、新しい芽を育てて継承する義務のあることはいうまでもない。その意味においても新聞柳壇は新人の登竜門として軽視することは出来ない。

選出に当り気付いたことは、江戸戯作の流れをひく、オ

モシロイ川柳が、社会一般の川柳を見る目であることに思いいたる。随って一般の老化が目立ち、投句者の七%が明治で、大正の後わずかに昭和がつづくといった年齢層の老化現象である。山本祥三氏の「マスコミ柳壇の最大の目的は、一人でも多く正しい認識を持ったファンを獲得し、川柳の社会的評価を高めるという柳界の悲願を代表していると思う。しかしこのPR運動がいかに至難な業であるかは過去の経過が実証している」といわれるように、新聞柳壇は社会一般の初心者と、純粋な一般読者の場であることを思い合せると、この現実の中で、新人ファンを獲得し、養成する業はまことに複雑な悩みをともなう。

明治、大正より新川柳運動は活発化し、それぞれの結社の中で、生れた句とは別に、革新論、文学論を吐いて誌上を賑わすことも、一つの砦の中での空しい咆哮のように思えてならない。それもこれも川柳するものの未完の姿なのであろうか。

だがここで新聞柳壇について、考えてみなければならない。新聞川柳が川柳家の内部からみた川柳観と異った重要性を持っているということである。紙面に表われる川柳は小さな枠の中で紙面の片隅にチョッピリあるというのではない。紙面編集という側からすると、政治、経済、社会、家庭、学芸など広い範囲に読者を吸い込もうとするとき、片隅の小さな枠の中にある数少ない川柳に、紙面全体をぐっと引締めるワサビとしての効果や鋭知につながる笑いを誘う甘味料ともなっているということである。つまり新聞の紙面全体のバラエティの重要なポイントとなっているということである。

新聞のバラエティの巧拙が今日の新聞経営に重要な意義をもっていることは中央紙であろうと地方紙であろうと同じことであるその競走に打ち勝たなければならない宿命に置かれている限り、紙面のバラエティにおける川柳掲載の重要さは香辛料としても甘味料としても、一つのポイントを受持っているというのである。

その点からいうと、選者として二つの選考方針を持たざるを得なくなる。一つには川柳作家としての立場から今日的な川柳を選んで川柳の評価を維持しそこから新しい実作者を生み出さなければならないのである。そうかと云って先にいった編集上のバラエティという面から選ぶときは作品そのものの巧拙より時機を得たピリットした香辛料の作品に、小さな枠にありながら諷刺の鋭利な刃物の光りがあるときがある。つまり選者の立場は、本来の川柳作家と読者の間にあって重要な媒介として役目を持っているわけである。

川柳作家からいって、あんなもの、を選んでと云われる場合にも時々遭うものであるが、それはそれなりに紙面全体からみた場合読者に、強い感銘や感動を与えている場合がある。新聞川柳とは川柳作家だけのものではなく新しく実作者を志ざす者には又とない機会ともなり、紙面バラエティのポイントとして役割を果たしているのである。

かじりつく石もなかった七転び
屋台酒ついにピエロの鼻となる

税務署と喧嘩しているうちが花

# 故日東里氏のことなど

尼　緑之助
（高知新聞柳壇選者）

私が現在担当している「島根柳壇」は島根新聞に四十数年の歴史を持続している。私がその柳壇に気を惹かれたのは大正の末期で、十代の少年時代だ。その頃、米村あん馬選で松陽新報「松陽柳壇」であった。あん馬氏が新聞社を老令退社されるまでの担当だったから一番長い指導者でもあった。それは兎も角当時は三百六十五日紙面を埋めていたことでもあり、読者も断然多く抱えていた新聞だったから川柳の推進には非常に大きな役割を果していたことになる。

私もここからスタートを切ったのであるから懐旧の念は大きい。

さて、私が前任柴田午朗氏（番傘同人）の後を継いでから七、八年或は九年にもなろうか、今手許に資料が見当らないので、頭のメモによる）

投句者を見ていると色々の種類があるのは勿論だが、週二回発表であるから、一応熱心な人でも週一回、五句乃至十句といったところが多い。私がこの柳壇を担当した当初ものすごく熱心な人があった。名は「日東里」隔日、しかも正確に、ハガキ一枚に十五句乃至二十句宛、毎週五十句は寄せられるのである。文字はていねいで、枯れている。句は少々古川柳臭が鼻につくが素人だとは考えられない。松江の柳友に聞いてもこの作者は（日東里氏は松江市と住所が記載されていたので）一年以上もわからなかった。名のある作家の匿名かとも思われたが判らない。

ともかく、一日置きに十数句、二年も三年も休みなく投句し続けるということは驚異以上である。日記ですらこんなに続ける人はないとさえ思われるのに、しかも句が一応立派である。全く驚き入った作家であった。

この人は検事正で、地方ではたいした高官であった。家族は郷里に置き、松江での独身ぐらし（日東里―ひとり）の雅号もなるほどとうなずかれる）学生時代から川柳に興味を持ち、独学で派閥の外にあったようだ。岐阜へ栄転さ

れてから私のすすめに応じ、川柳雑誌に投句、後不朽洞会々員になられ、仙台高裁に在任中死去されたが、惜しい、異色の作家であった。

話は逆戻りするが、投句がいつも多いので巻頭へ持っていくのが常であったから、依故ひいきするのはけしからぬという抗議もあった。

毎日新聞島根版も二年余り受持ち、支局長の注文があって評に力を入れたが、これは意外に受けたが、支局長が転任すると柳壇が打ち切られた—のは残念、NHKもやりかけたら年度替りから廃止、地方柳壇は少しずつ伸びているのに、マスコミがそっぽ向く—とは何故か、あまり感じのいいことではない—投句者は多いとは言えないが、見ている読者は多い。毎日新聞の場合など、いわゆる門外の人から賞讃されたのは、お世辞とばかりは受け取れぬものが多かった。

日東里句抄

飛弾の春触れば染まるほどの青
何時の間に起きたか笑う新世帯
客みんな帰りいつもの顔になり

（島根新聞柳壇選者）

# 新聞の商策

川岡霊眼子

昭和十九年大阪から九州に疎開して、最初佐賀県の鹿島市に居た。佐賀の北島醇酔や、小城の秋光驟雨浪などと佐賀新聞の、川柳往来の選をしたことがある。そして、現在の長崎県の諫早市に移り住んだ。

昭和二十五年、私が中心となって、新川柳文化運動の推進をめざし、諫早川柳文化会として、県庁にも文化団結社届けも出し、毎月一回例会として、会合を開き、作句、合評など行っている。

**人の世の生きる灯となり杖となり**

作句を楽しむだけでなく、修養会を兼ねる運動をめざして、現在、男女会員三十二名程ある。投句者を入れれば、もっと多勢となるわけだ。

なお、八十数名からなる、天寿会と名づける、六十才以上の老人会の中にも、川柳部門があって、私は未だ六十歳にならんので、会員ではないが乞われるままに、これおもあわして、毎月指導と選に当っているが…、

最近とみに興味がついたのかとても熱心で、その精進の程が見られるようになった。

新聞は多く、長崎時事新聞である。現在、長崎県内には長崎時事新聞社と長崎新聞との二大新聞が覇をきそってい

# 新聞柳壇の選

る。時たま両方を使うが、私は主に長崎時事新聞社側の選をやる、長崎時事新聞には以前、私と昵懇なのが編集部に居て、私が日本を代表する麻生路郎先生の直門というのを買ってくれての、新聞社の公認選者として、当時委嘱された訳である。

新聞柳壇の選は、あらかじめ兼題を二十日位い前にローカン掲示欄に予告掲載しておいて、選者である、私の事務所宛に各月の一般読者からの投句、三句以上を寄せて貰う。集った句を氏名別に一句ずつチェックする。例外として、私のモットーとする「名句は自分のものとして、存在するものでなく人の為め存在するものである」との持論に基づき闇に葬り去ることを惜しんで〃没〃にせず二句拾いあげる場合もある。

**新聞の商策チョッピリ担がされ**

新聞社は大体新聞の購売力拡大の為め短歌、俳句、川柳といった文芸欄に載る人達の購読心多集主義が目的だから一名一句主義を主張するのである。

小さな紙片に、無記名別に句のみ書き抜き、特選一句、準特選一席、二席、五客の入選句をとり、佳作は総投句者の人名のもれないように必ず一名一句は選び出す。特選、準特にはいずれにも〃評〃を入れる。〃評〃は紙面制限上三十文字以内と限られている。

従って一名一句主義は同一人物の場合は佳句も没になって、人名別に拠る拙い句が紙上に発表されることになる。なかには全く川柳になっていない標語調や俳句調のものもあって困ることもあるが、それはそれ、新聞社の主義であって見れば一人でも広く見て貰うのが目的の新聞だから、止むを得ず添削を加えさして貰って我慢して頂く……

このような添削発表の方の分は参考と精進への「しおり」として頂く事にしている。

他人の作句を批判することは、誰でも出来るが自らが名句を産み出すことは容易でない。

選者になっても、多年の経験と、非凡な選者眼の持主でなければ、完璧に近い選は到底出来ない。選者が何人か居て、同じ句を同じ価値で揃って選んだ例が極めて少ないのを見ても判る。

目、鼻、耳、眉、口いずれも顔の面に配置されているが世界で二十八億、すっかり同じ顔という人間が全く見当らぬように、川柳も僅か十七音字を一応定義とする同型のものを、いろんな詩的形状に現して風刺あるものにする。つまり文芸的短詩文学の美男美女を造り上げる妙智、妙手が要る。

作句の上手な選者もあれば〃評〃の仲々うまい選者もある。従ってよい選者と、云われようとすればそのいずれにも優れていなければならないと思う。日進月歩世は進む、ややともすると

**教えたら教えた智恵でしてやられ**

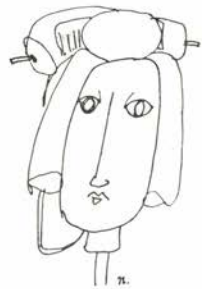
こんな嬉しい状態になる。従って選者といえども、常に時の流れに竿さして、前進への精進と研鑽が必要となる訳だ。私は選に当って詩的字句の配置は勿論作句者の着想（捕えどころ）に重点と興味とを以って、投句者の作意をあやまつことなく、充分吟味して、その意図を理解することに心を注いで新聞の選をしている。

**満ち足りた気でペンを置く雨の音**

（長崎時事新聞柳壇選者）

# 秀句鑑賞

—前月号から—



後藤梅志

**早いものだなと一言　定退す**

（どんたく）

現今の定年は満五十五才である。就職してから三十年か、三十五年決して短かい年月ではないのだが、わき目もふらず勤め上げてみれば、早いと感じるのも無理はない。

恐らく衷心から出た一と言であろう。今の定年制が五十五才は早いという説は、早くからあるが、勤め方にもより、体力をまだ消耗し尽さない内がましなような気もする。

還歴をむかえる六〇歳からになっては、それこそつぶしが利かないであろう。

この句はスッパリとしたところがあり、勤務振りまで、うかがえるのである。

**吹けば飛ぶような退職辞令なり**

（丁　路）

この句は、前の句とは性格ががらりとかわって、どこか逞ましいところがある。

元来就職の辞令と、退職の辞令とは、うける感じがちがって居り、愛着の度合もちがうのである。退職辞令を机の上にのせて見ると精勤に対する感謝の文字もなければ、ねぎらいもない。ホンの二三行きまり切った文句が印刷してあるばかりだ。窓から風が来て、吹きとんでしまっても惜しいと思わない、非情さがそこにはある。

しかし、これが人生だという感じも又動かない。笑って対処するほかはあるまい。

**しあわせなこともなかった掌を見つめ**

（小松園）

この句は少しも新しいことはない。否むしろ陳ぷに属するのだが、にくらしいほど染染する句である。

小松園氏が、どっちかといえば、家庭的にも恵まれたほうであるだけ、これは似合ぬ句だとケナされても仕方があるまいが、ふしぎな魅力をもっているのである。

ただし、この句は一字、一句ちがっても、崩れてしまうのである。口語をうまく使った一例としたい。

**緑衣脱ぎ捨ててもみどりなるは女**

（薫　風）

「まあね、理屈を云ってるんですよ。英語の詩というものはネ」

「翻訳していると、これでもか、これでもかとネ。おかしいですよ」

こんな話をしたのは、或る大学の英文教授であった。其后会わないが、そんなものかと思った。十年ほど前の話である。

美くしいものを、ただ美くしいと云ったのでは、曲がない。そこに文字を解する人類の夢がある訳だが、西欧人は理屈で云う。日本でも真似をしているが、やはり理屈ぽい。しかも、川柳となると、十七字型を消化しなければならないだけに、ぎごちなくなる。そこに、現代柳人の苦渋がありそうだ。

その点この句の技法はソツがない。女体のもつ美くしさと、やわらかな曲線を画いて清純。六月の、緑のトンネルを脱け出してきた女性（によしょう）が、婉然とそこにいる。「みどりなるは女」がとくにいい。

**女店員わたしもほしい柄を見せ**

（明　朗）

ふつうデパートの呉服部では、女客相手だから男子店員を置いて、高級呉服には女店員

を置かないが、最近は洗練された女店員もいる。しかし顧客心理とでもいうか、女同志は痛々しい感じがして、工合いのわるいものだ。

この句のように、機転をきかされると、そこは金をもつ者の弱味で、ころりと参ってしまう。女性心理をかんじさせる句だ。

**気の弱いのが人混みではぐれかけ**　（無　鬼）

面白い句だ。人混みというものは、めいめい勝手なことを考えて、勝手な方向へあるくのだから、ややこしいのは当然である。

気の弱い人はまた、人をよけよう、よけようとするから、歩行もゆるくなり、たちまち人渦のなかへ紛れこんでしまう。こんなのを連れて歩く人は、女や子供でないだけ、世話のやけること、世話のやけることである。

人事百般、あまり気の弱いのは考えものようだ。

**ジャンケンに負けて町議を棒にふり**　（宗太郎）

立候補に際し、町会議員というものは、候補者同志ジャンケンで決めるものらしい。

三歳の童子から、ヒゲの生えた旦那様までこのジャンケンが運命を左右するとはおもしろい。北浜で相場が上か下か分からないときは、割箸を立ててみて、倒れた方向で、売るか、買うかの思案を極めるのと似ている。

但し、町議のほうは、ジャンケンで負けて引っ込んだ方が、何か役得にありつくのがせめてもである。

**レオポンに似た句を眺め淋しい気**　（喜　由）

レオポンというのは、ヒョウの雄と、ライオンのメスのあいのこ動物である。

この動物は、顔や骨格はライオンに似ているが、からだには美くしい斑点や縞があり、みる人が戸惑うのである。タイゴンというのもあるが、これは虎とライオンの合の子で、まだ日本には居ない。このように、性格のハッキリしない合のこ動物ばかりが現われるようになると、人間自体がややこしくなることを免れない。

さて川柳だが、最近の句は、俳句だか川柳だか分からない句が、多くなった。

句の性格もはっきりしない。一体どんなことを考えているのか、人生のなにを求めているのか、了解に苦しむ句がおおいのである。

作者は、それを眺めて淋しいと云う。全く然りである。しかし、これも当分の辛抱である。やがて作者も愁眉を開くことになろう。

**わたしは柄夫は値札ばかり見て**　（実根子）

夫婦仲よく揃って、買物をするのに、連れの夫が値札ばかり見てあるくのは、気の利かない話だが、ちっとも妻の気持ちを察して呉れない夫には、あいそがつきるのである。

たまたま、何か買ってやろう、さあ行こう。で出て来たものが、これである。妻たるものやりきれないではないか。よくあるが、この句面白い。

**間違って妻の匂いのバスタオル**　（流　路）

妻には、妻専用のバスタオルがあり、めったに夫のと混同することはないのだが、どうかすると、ああこれは妻のだったかと、気付くことがある。そんな時、瞬間鼻をうつ、妻とく有の匂いには、甘い回顧のなつかしさがあり、できるだけ知らぬ顔をしていたいものである。この点いくつになっても、変りがない。この句、粗忽が句になった観がある。

**そろばんが合うたとあたり前の汗**　（千　翁）

簿記というものは、貸借のバランスが一致するから、必ず合うものなのである。

それが合わないのは、どこかで算盤がちがっているか、付け落ちがあるからだ。

ところが算盤というものは、一度で合わなければ、同じことを三度くり返さなければならない。いきおい緊張するから、間違えば一ぺんに汗が出る。たとえ一ぺんで合っても仕事をしたあとは、しっぱり汗になる。この苦労はハタから見ては分からないものだ。

こうした環境と事情が、この句は自分自身の立場で、面白く出ている。

おわび！雅号ぶっちゃけばなし休載

# 近作柳樽

大田市　藤田軒太楼

うつぷんがのれんを分けて腰を据え
子の好意老の頑固が受けつけず
口許もよいが可愛いい鼻も賞め
その調子忘れまいぞと愛の鞭
その処分待つたと赤い旗がたち

八尾市　宮西弥生

深山の美ここも削つていくダンプ
ライバルが弱味見せだすあてはずれ
冷静な女くずさぬマイペース
別々の気持で逢うてる日の誤解

広島県　高橋鬼焼

アスハルト切れて国道村をぬけ
金策に行く里があり母があり
しあわせな蕾鋏の目をのがれ
晴着きて小さな義理に座らされ

## 菊沢小松園選

竹原市　三宅不朽

藤の花風情なおます京言葉
それぞれの妻へ素直な目出度い日
順々に口つむがせる注射針
親でさえ誤解ましてや他人なり

カルホルニア　斎藤流路

アメリカも毎日背広を着るでなし
振りあげる拳明治の声を出し
疎んずる言葉煙草と共に吐き
消印をのがれた切手はがしてみ

倉敷市　水粉千翁

ままならぬ塀の高さで世話になり
つぶやきのまだあきらめてないらしい
ふるさとの自慢どつちも耳を貸し
ゆつくりと出来ぬと里の母が来る

青森県　岩淵一星

東京は寝言も母を呼んでいる
銀行の数字眼鏡をかけかえる
給料日だけは牛歩でない人夫
お茶腹にされてセールス断られ

大阪市　和田痴亭

厭応なし酒やめさせる心電図
減食までしてけわしい美女の道
ホステスとして口先の愛を売り
半分は約手で済ます手切金

出雲市　竹内李朋

市川団蔵丈逝く

法眼も髭の意休もなく独り
広重の傘は庄野の雨を衝き
ウインドの妻の吐息が追い縋り
鍵つ子が話かけてる鯉のぼり

八幡浜市　別宮すき

子へ便り切手も入れて催促し
事故現場腕時計だけ動き
ころび出たパチンコ玉でウソがばれ
ハイヒールころんだ道を二度行かず

出雲市　王紫

切られても刈られても咲く垣根バラ
栄光の座にも孤独は従いて行き
段落をつけるつもりの夜を眠り
燃えつきる時を知つたか灯の真紅

竹原市　小島蘭幸

時間気にするパチンコは負けている
信用をされているので困るなり
いざとゆう時には自分一人なり

大阪市　小谷葉子

逢うた時だけふた心でないわたし
つややかに舞う白足袋が蝶に似て
駈け落ちをしたとは見えぬ老夫婦

大阪市　吾郷玲人

半分は笑つた顔で叱られる
梅漬も上手で主婦の座は堅し
薄う着て夏の女は美しい

羽曳野市　杉本白扇

産院の扉帰りは母となり
母からの便りは声のこぼれそう
じれつたい恋仲今日もベンチに居

仙台市　川村映輝

新庁舎人間だけが古くさい
旅をせぬ妻に無理して庭つくる

チグハグに呼んだ子供らみな巣立ち
桜井市　岩本雀踊子

下に出て出てお役所を無事に出る
現実に戻れば金のいる話
男気の弱さへ女あまえて来
羽曳野市　谷垣史好

いさかいの後のさみしい片えくぼ
みひらいた瞳に一途な恋があり
余情無くナイターの灯はすぐ消され
広島市　上代美文

貸傘もある故郷の駅に降り
オルガンだ百科辞典だ一年生
アパートの二階の窓へホームラン
愛媛県　関本柳剛

鍵つ子を釘付けにして鯉幟
本当にすまない様な身のこなし
訳聞いて欲しい女が寄せる膝
松江市　錦織陽子

いさかいの解けぬ夫婦に冷たい夜
面会の予感へそっと紅をさす
慕情断つ決意のにぶる春の夜
和歌山県　山本泣笑

耕うん機牛を肉屋へ追払い
目をどこに置こうか膝上十糎
制服を脱げば十人並だった
松山市　西川みやこ

参観の目は矢のようにわが子追い
居なければ気になり居れば小言いい
カタログがちよつぴり夢をおいてゆき
愛媛県　槙紫光

お見合の席で水虫かゆくなり
負けん気は中風になつてもまだやまず
こけし棚だるまはボスのようにいる
島根県　堀江正朗

農薬へほたる抗議の火をともし
大切な話と知らぬ生返事
見えぬ眼へ百合は匂いを送つて来
大阪市　小東琴女

見る人が見れば解るとつかまされ
拝観料とつてテープで流しとき
二た股をかけてどつちもすべつて来
鳥取市　藤本佳女

出港へ切れたテープをまだ握り
園芸誌表示の様に花咲かず

流水にもまれて石のかどがとれ
八幡浜市　平田砂生

客人の当て馬らしい招きよう
下駄箱を調らべてそつのない靴屋
むしタオルかぶせて物を聞く床屋
大阪市　江城功雄

倖せは癒えて親子で囲む膳
バラ崩る愛のむなしさ責めるごと
振り向けば後姿の友ばかり
石川県　同村虹要

甘党の失恋ドラマにはならず
ドラマより面白かつたコマーシャル
子等みんな育ち腹立つ日が多し
岡山県　瀬戸山文平

肺癌の口実ロングピース吸い
耳鳴りへ確かに刻む腕時計
エプロンの匂いの若い母憶う
玉島市　井上旭峯

生活が乱れて美しいものがなし
人生に続きがあつた二度の縁
札束を拒む若さを見つめられ
龍野市　森下峰子

本当の未来知らないのが強み
大胆なモードで身体の線が見え
世話人は余分の折で飲み直し
北九州市　三上春雄

君は飛車僕は歩だつたクラス会
合理化とテコ入れパチンコ屋で出合い
四捨五入すれば月給大差なし
岡山県　目賀芳月

風物詩などと貧農写される
平行線のまま銀婚にたどりつき
カレンダー四季それぞれの花があり
八幡浜市　平田三立

テレビにて俄仕込みの世界通
鯉のぼりだらりとしても目は光り
雑布へ二度のつとめというタオル
和歌山市　秋月宏方

ゴルフ場日本は土地の広い国
もう覚悟きめてホテルのドアを押し
鳥取市　鈴木村諷子

行くあてがあつて犬さえ歩くなり
浴槽で防水時計でご座います
高槻市　山田スミ子

扁風機それでよしよし首を振り

折たたみ買つてやつたが又とられ
米子市　八木千代

クラス会校歌出るころ若返り
安全帽脱いで老母に迎えられ
京都府　菊沢破天

玉子取るだけの餌とは知らず生さ
あるだけの知恵を絞つて笑われる
竹原市　時広一路

時間見るだけのテレビもつけてみる
タクシーの今日も酷使の粁が増え
奈良市　村上春己

見物の羽田でハンカチ振つて来る
見返えればまだ斑鳩に塔が見え
大阪市　今井岳太

相縁奇縁今日は破談の使者となり
山好きの登つて見れば分ります
七尾市　松高秀峰

ボーナスをそつくり廻した台所
切れ味の度が過ぎとうとうくびになり
八代市　永松道雄

親に似て泥にまみれて鳴く蛙
万一に備えて渡す保険証
鳥取市　わたなべ・かずこ

撒いた気でいたのにちやんと先廻り
女中部屋唯の女で肩で泣き
大阪市　森本良夫

休日の父はパジヤマを着たまんま
勇退の言葉で友も去つてゆき
大阪市　宮地和楽

一徹の父が余生を孤独にし
平安の都へ考古の鍬が生き
善通寺市　岩田太一

犬も犬野犬の雄を連れ戻り
プレハブと言うから壁を叩いて見
米子市　林瑞枝

保険屋に鍋の煮立ちが気にかかり
玉葱と知らぬ涙で気を揉ませ
羽咋市　三宅ろ亭

外出へ妻懇に化けて居り
子の便り親金持ちと思つとり
大阪市　西本保夫

赤旗も振らずじまいで妥結する
口紅が大きく迫る急停車
愛媛県　豊島二九三

紫と赤に手がある藤娘
文学がどうのと評論誤字だらけ

河内長野市　森本黒天子
職捨てて見れば弱気に変つて来
重いもの持たして呉れぬ年となり

鳥取市　近藤秋星
久しぶり新聞隅から隅まで読み
ささやかなこのしあわせは犯させぬ

宇部市　櫛部いさ夢
行商人手帳に書いた元を見せ
老社長手帳見ながら黒田節

大洲市　堀内暁風
真相を今は言えない時の人
花嫁の乗るタクシーは取りまかれ

泉佐野市　大工睦夫
白壁に左官が癖の跡残し
声のかれ具合で投票日も近し

広島県　南条露声
ままごとの手つき段々ママに似る
くどくどと他人の急死きかされる

青森市　黒滝素朴
主流派はやはりとんとん出世する
社長ともなつて或る日の孤を悟り

出雲市　大賀美沙
空瓶のように静かな春の朝
蟻をみて明日の暑さに水を汲み

米子市　石垣花子
葬儀屋が説明つきで骨を入れ
別居とは名ばかり親は隣りから

八幡浜市　山本初音
へそくりもだまつて出せぬオルゴール
信心がささえとなつた不倖

寝屋川市　福富隆子
私より層買い良い服着て計り
あの時に帰りそびれてからの仲

名古屋市　花東千久良
突破口を銀行屋さんに教えられ
良心がとまどいしている片笑くぼ

東京都　浅野竜泉
失恋をする度お酒つよくなり
雑踏を好いて上京したでなし

西宮市　前田金魚
ざあます族夫以外は舶来品
口げんかしてから嫁とうまが合い

松山市　西川祥之助
去にともない気を終電のせいにする

茨木市　高木繁太郎
電話なき名刺二の足引けをとり

大阪市　坂川有子

病人の軽い順から世話をやき

愛媛県　嶮本満子

七面鳥の味知らずともクリスマス

山口県　西畑霞

精肉屋洗つたような骨も売る

鳥取県　堀江芳子

とばつちり来そうな気配へすつと立ち

ハワイ　上田紅渓

聞き覚え叔母の六段まだ上手

出雲市　竹内李羅

子を写すカメラ人前憚らず

八幡浜市　菊池美香

日時計に腕の時計も合せて見

八幡浜市　脇水鳴子

泣きごとも新婚さんは寝て忘れ

笠岡市　木山要次

婦人科によほど決意の顔が待ち

島根県　石田清泉

空虚なる心も満たずちぎれ雲

鳥取市　藤本鎮也

愛情へ知性が心の扉しめ

高知県　山川勝子

皆留守に集金困る田植時

松江市　岡崎祥月

カーブームペタルそろりそろり踏み

西宮市　船津千夏

斜陽族になつてたつしやと友の便

倉敷市　水谷谷水

票にならぬ話それつきり酌ぎにこず

大和郡山市　中内孚彦

マイペース煙草は飲まず金貸さず

笠岡市　松本忠三

扇風機の位置を確め座席占め

尼崎市　平井露芳

すれ違い視線合わずで礼がそれ

松江市　町中村魚

先祖代々農家はみんな共稼ぎ

尼崎市　岡本昭三

あの人にわびて嫁いだ玉の輿

島根県　小砂白汀

三日経ち就職やつと便り書け

善通寺市　伊藤歌子

菖蒲湯でしぶきをたてる男の子

松江市　川上すみえ

えんぴつの乱れもうれし子の便り

# ――いのちある句――(3)

戸田古方

「芸術――美しいものをつくり出そうとする人間のはたらき、またそれによってつくられた作品を芸術という。芸術の美しさは自然の美とちがって、人間のつくったものであるから、そこにつくった人の感じがあらわされるもので、そして、美を生み出そうとする活動は人間が生れながらもっている性質でありいろいろの方法や材料であらわされる。……

芸術はこうして人間の情操（真をたっとび道徳にしたがい、芸術を愛する気持）を高めるのに役立っている。」

「文学――人間の心や感情を、喜びや悲しみを、愛やなやみをことばや文字で書きあらわした芸術。その場合詩歌、小説、戯曲、随筆と四つの形式がふつうおこなわれる。

文学は現実をそのまま報告する報告文学の様式もあるが、たいていは作者の創造力をとおしてつくり出される。このような作者のイメージ（心のすがた）が文字に表現され、文字をなかだちとして、その感情が人々に伝えられる。」

「近代文学――近代文学の生れたのはヨーロッパで、近代の市民社会が成立して、個人の自由がはっきりみとめられるようになったのとほぼ一致する。近代文学はその意味でまずイギリスにそだてられ、つづいてフランスにルソーが、ドイツにゲーテが生れて、ここにはじめてほんとうの近代文学が生れた。近代文学の特長の第一はまず何より強い個性の表現である。次に近代文学は「人生いかに生くべきか」という人生社会の問題を重くとり上げる。第三に個人の行為をとおして、社会の動きをえがこうとする。ロシアのトルストイやドストエフスキーの文学の広さと深さはここにある。また第四に魂の告白という形で強い個性を主張する。ルソーの「告白」などはこの例である。第五にだれにも読みやすいことばで、そして散文で書かれるものが多い。近代文学のいちばんたいせつな流れは散文で書かれていることである。これを一まとめにして、近代文学はまず人間性の文学であるといえる。日本では近代社会が成立したのは一九世紀のおわり（明治中期）であるから近代文学の歴史も伝統もあさく、かんじんの個人の自由もまだしっかりそだて上げられてはいないので、心理描写法はフランス文学にまなばねばならず、社会とのつながりもあさいので、小説という小説が政治や社会に関心がうすく、家族や男女の愛情などいうせまい視野の中でくりひろげられているありさまである。」

「芸術」「文学」「近代文学」はこれからの話に折目をつけて行きたいので、少し長くなりましたが事典から引きました。しかし、いずれも少年向きにかかれた保育社の学習百科事典によりましたので、難解な術語なども出てこずかえってすっきりしているかと思います。

## 「川柳研究」200号記念句会

日時　八月二十一日正午より
場所　「湯島会館」
　　国電・地下鉄、お茶の水駅下車
宿題（各三句）
　祝う　村田　周魚氏選
　双生児　早川　右近氏選
　まるまる　藤島　茶六氏選
　号泣　三浦太郎丸氏選
　研究　小谷　源氏氏選
　前へ　川上三太郎　選
席題　三題（宿席共〆切二時半）
会費　百五十円（茶菓・記念品呈）
東京都葛飾区新小岩一丁目五六―
三　三浦三朗方
川柳研究社句会部

路郎川柳手拭い

「子沢山僕のまくらは何処へいた」

# 路郎忌川柳大会

会場　大阪天王寺慶沢園

とき　昭和41年7月10日

祭詞を読む中島生々庵主幹（舟遊氏撮影）

亡き路郎前主幹は「晴れ男」として有名だつたが、生々庵現主幹は「雨男」として、これまた知らない人がない。そこでこのお二人をミックスしたのが大会当日の天候となるわけだが、事実はそのとおりで「降らず、照らず」の気温二十五度という、七月にはめずらしく涼しい大会びよりとなつた。

前日まで降りつづいた雨に、会場である慶沢園の大庭園は、文字どおり緑したたる大パノラマとなる。

「やあ」

「おう」

と、握手を交わしあうのも大会ならではの場面である。予定の二百には達しなかつたが、長野県の高峰柳児氏、東京の阿部佐保蘭ご夫妻をはじめ遠来の方々の多数のご出席は感激のしつぱなしだつた。

午前十時すこしまわつたとこで、美声西尾栞氏の司会で開会を告げられ、おごそかな奏楽の中に中島生々庵主幹が「祭詞」を読みあげられる。

正面には故麻生路郎先生の胸像が、ご生前そのままの姿でかざられ、その両側には「川柳雑誌」の合本が五十年の歴史を語り、さらに恩師の「ふるくとも僕には仁義礼智信」の名句が赤地の軸にさんぜんとかがやいていた。黄菊白菊かおる中に生々庵主幹の声が場内から大庭園の隅々まで緑の茂みをぬつて流れていく。

祭　詞　　中島　生々庵

本日第一回路郎忌川柳大会を催し、茲にその第一部の祭典を行うにあたり、ご尊像の前に立つて御礼やらお詫びやらお願いやらを申上げたいと存じます。

先生が御長逝になつてから、一年という時間があつという間に過ぎてゆきました。七月七日おなくなりになりましたその日から、私達元不朽洞会員をはじめ門下生一同、全く魂を抜きとられたように、たとえば丁度赤穂浪士が城明け渡しで散り去つて行つた、あの気持ちにどこか似かよつたところさえあつたのであります。そして私達は、これからどうするのだ、どうすればいいのだ、どうすべきであるのか、そんな事は誰一人として歯をくいしばつたまま口にはしたくなかつたのであります。しかし、その時すでに私達一人一人の心の奥底には、先生を失つた寂しさ、悲しさを乗り超えた、一粒の根性が芽生え始めていたのでありました。そしてその一粒一粒が、どちらからともなく縦に横に手をさしのべ合い、固く逞しく握り合つているのでありました。

何がそうさせたのでしようか。思いがここに至りました時、私達は今更のように先生の偉大さというものに、はつきりと触れたのであります。ご生前中は余りにも身近かに育てて頂いたせいもあつて、いうなれば自然の恩恵の有難味を忘れた生物が、急に太陽と空気を奪われたように、或は突然水から離れた魚のように、愕然としたのであります。あまつさえ今から思い返えして見てもそら恐しく、肌に粟を生ずる事ではありますが、ともすれ

ば身の程も知らぬ井戸の蛙が、不平がましい愚痴を、もつともらしく口にする事さえ、まあつたのであります。これはとりもなおさず、ご寵愛に甘えきつた私達が贅沢に馴れ、拝むことを忘れた、文字通りの罰あたりものとも申すべきものであつたのであります。私は只今、ご尊像の前に立つて、御礼やらお詫びやらを申上げたいと申上げましたが、実を申しますと御礼どころか一言のお詫びさえ申上げる言葉を見出し得ません。このとりかえしのつかない心持ちのせつなさが、ここまで追いつめられて参りますと、ただ、ただ、おん前にひれ伏して「先生、明日からの私達をご照覧下さい」と申上げる以外に何ものも存じません。先生からご覧になれば、まことに力弱く、歯がゆいことばかりにお思いになられましょうが、その吹けば消えそうな「ともしび」ながらも、一つ一つよりそうて僅かずつではありますが、明るさを増して来ているのが「川柳塔」の今日の姿でございます。

この上とも、先生のご加護によって一人前の焙となって燃え上がるように、否、将来は雲の峯のお膝元まで届く大きな焙にまで育て上げることが出来ますように、お願申し上げるだけでございます。このせつない悲願こそは、ご高恩の万分の一を報ゆるたった一つの残された道であり、且この残された一つの道が、どの位苦しいけわしい道であるかという事も充分覚悟しているところであります。

**路郎先生一周年祭**

追悼

淋しきうちに
一年たちぬ梅雨寒み

**湯室　月村**

路郎先生の胸像の前で挨拶をする麻生アート氏　（舟遊氏撮影）

私達にとって大変しあわせなことには、先生が長いご生涯を通して全国津々浦々に播かれた大きなご遺徳によりまして、大方柳社諸先輩の暖かい、力強いご支援を頂いていることであります。

よしやテンポは遅くとも、上辷りでない、つけやきばでない「川柳塔」を育ててゆきたいと三百の同人が一人一人心の奥底に誓い合っております。

「先生、どうぞ、明日からの道への、私達の精進と努力をご照覧下さい」と再びくり返えして申上げて、今日の祭典の言葉と致します。

生々庵主幹の祭詞がすむと〃献花〃である麻生アート氏、麻生葭乃先生につづいて生々庵主幹が理事長として献花をされ、そのあとに同人知友多数献花合掌の列がつづいた。

若本多久志氏の開会の辞にはじまって、堀口塊人先生と岡橋宣介先生の追憶談が満場を魅了する。（スペースの関係上、活字に出来ないことが残念）

席題は北川春巣（同人）平賀紅寿（京都）高峰柳児（長野）三条東洋樹（神戸）諸先生兼題「一徹」は近江砂人先生だがご病気のため生島鳥語先生が代選。「天井」椙元紋太先生選は、やはりご病気で増井不二也先生が代読「雲」川上三太郎先生選も脇田梅子先生が代読され、川村好郎氏が閉会の辞をのべられるまでの三時間半は息づまるような興奮に終始した。

これらの披講を庭園の芝生にマイクを通して聞きいる人々、池のほとりで静かに入選句を句帳につけている女流作家、または「国鉄組」の浜田久米雄氏や「岡山組」の方々が二十人ばかりが輪の中で、輪の中の作家が入選すると拍手して祝うあたりほほえましい。

「大陸組」のパンチ・トリオ、東野大八、大井正夫、宇和川木耳諸氏の中へ不二田一三夫がとび込めば、ガゼン鼻っ柱カルテットが編成され、イヤモウ鯨のアレがどうのとウルサイこと。

「あの方は？」と大八氏が威儀を正して指をさす方を見ると、福井野迷路元軍医中将閣下の勇姿である。戦場で左手を失なわれた大八氏は「さすがにご立派だ」と感慨げにうなずかれたものである。

「四国組」や「広島組」のほかに「島根組」の人々は尼緑之助氏を中心に、藤井明朗氏や、盲目の傷痍軍人堀江正朗氏が出席前夜に義兄弟を誓った石田清泉氏に付き添われての美しい友情など多くの話題を生んだ。

「番傘」や「ふあうすと」のおレキレキを

はじめ他社の方々がおもいおもいの場所でビールや酒、または大萬自慢のすしなどに舌つづみを打っておられる中を清水白柳氏、河相すゝむ氏、橘高薫風氏など顔の売れた人々が右に左に飛びまわっていた。

「いい会場だなぁ」と、

すこしでもよろこんでいただけたことは、この日までの四カ月間の苦労が、きのうまでの雨のようにサラリ流れた感懐である。

スペースがないので充分書きつくせなかったが、工藤甲吉、竹原川柳会、永田六竜子、田垣方大諸氏の電文や電話、またそのほかに多くのお手紙で盛会を祈るのご激励をいただいたことを厚く御礼申しあげます。（F）

★**おことわり**。席題入選作の雅号を句箋の番号で発表しましたが受付けの混雑から一部手落ちがあり、句と雅号にまちがいがあれば次号で訂正いたします。（編集部）

## 席題「飛　躍」　北川春巣選

もう課長になってるような口を利く　無鬼
飛躍する話に欠伸かみころし　花梢
飛躍する思想世間を狭く住み　与呂志
飛躍するつもり日本の物価昇り　句念坊
幼稚園へ体力ついて来ず　有子
もう東大へ引くレールビル建てるまで　紫光
飛躍でけつまずき鉄児　昇
業績の飛躍へ社長の金一封　水客
どたん場のジャンプ秘策を秘めている　梅志
二二がハ社長がもっている答え　かつらき
飛躍する人がかがむも知っている　照一
これからが飛躍慶沢園に立ち　太路
地下街に開店飛躍をするつもり　静水
七人の敵あり飛躍胸に秘め　たつみ
羽衣をかりても飛躍したい僕　十九平
国連の飛躍へ憲法邪魔になり　一合
が憂国の士に飛躍させ　酔夢
ライバルもおんなじように飛躍する　舟遊
飛躍するチャンス摑んだ依願免　柳志

前列左から宇和川木耳・高峰柳児・後列右から
大井正夫・東野大八・不二田一三夫諸氏
（薫風氏撮影）

君情熱だよと飛躍を誓わされ　静水
飛躍した話議場を煙にまき　酔仙
ジャンプする姿女の顔でなし　金三
飛躍してみても精々二十センチ　野迷路
飛躍した話隅で聞く欠伸　柳太
飛躍する自信合併すると決め　いさむ
飛躍した理論に年輪知らされる　多久志
故郷捨てた少年の夢飛躍する　酔仙
太陽にいどみ若人飛躍する　操子
大飛躍六大都市に持つ支店　一麦
飛躍する大志嫁ほんからくずれ　万的
飛躍して値上りを待つ板囲い　竹荘
食堂の飛躍その名はレストラン　萬楽
海広く埋めて工都の大飛躍　言也
大飛躍高層ビルが建っただけ　狂二
飛躍した意見議事録取り上げず　珠笑
飛躍した意見が本気に社を思い　白溪子
飛躍する覚悟へドラの音が躍る　奇童
飛躍した吾が子に見入る一周忌　ユキ
飛躍する社の方針の十カ条　俊介
末席が急に仕舞いをやると云い　吸江
産業博少年の夢飛躍する　俊介
飛躍するつもりへどっこい税務署　豊太
どんぐりに甘んじ飛躍したがらす　一舟
大臣の答弁飛躍を疑がわず　白溪子
飛躍する筈の株値に引っかかり　永断
喫う隙も与えず飛躍する話題　久美子
飛躍したプランを易の灯にただし　野人
佳
移民船みんな飛躍の夢を乗せ　一三夫
東京に支店飛躍の第一歩　萬楽
飛躍した国威をしめす逆輸入　金魚
御無沙汰の言訳け事業に飛躍中　没食子
税金のために働くよな飛躍　恒明
人
若返り人事に飛躍する社運　久美子
地
トラックをまた買い女の子も雇い　久米雄
天
企画部の飛躍が怖い会計課　紅寿
軸
日記には飛躍と書いて宵寝する　春巣

## 席題「聖　人」　平賀紅寿選

聖人は死後も楽しむように生き　柳宏子
聖人になれず凡夫でいる平和　紅人
聖人の生家昭和の壁を塗り　清人
聖人のような夫でものたらず　弘生
聖人にされて二次会はずされる　一三夫
女嫌いただそれだけの聖人さ

聖人に行先などを聞くなかれ　眉水
聖人のようだったとは死んでから　良夫
聖人と云われる俺がみじめすぎ　静水
聖人が気ままに生きる釜ケ崎　俊介
人並に妬いて聖人親しまれ　静馬
聖人の貌して鳩にとりまかれ　久美子
教科書に載って聖人世に残り　白溪子
やわ肌も知らず聖人老けてゆき　多久志
万巻を積んでひじりにほど遠し　梅志
銅像になって聖人らしくなり　静水
聖人ねなどと女に馬鹿にされ　紫光
聖人を望まず凡人らしう生き　小石
よんどころなく聖人に似た暮らしを　金魚
乗りおくれまいと聖人でも走り　春巣
聖人の遺徳は此処に観光船　花村
聖人は咳の一つも生かされる　恒明
聖人の見おろす位置に村平和　不二也
聖人の怒りは天が加勢する　きさ子
聖人にかくし子がいた遺書が出る　梅里
聖人のようだと他人さんが思うなら　花梢
聖人でない幸せの笑い声　凡九郎
聖人の母にあまえて見たくなり　雀踊子
一竿に静寂を釣る聖り人　与志
聖人の顔で株欄じっと見る　吸江

「艶」の披講する麻生先生
（舟遊氏撮影）

聖人とは昼をまじめに過ごす人　秋月
聖人と呼ばれ養老院で逝き　泡水
聖人と云われる祖父に過去があり　阿茶
聖人に似た初恋のこころもち　塊人
聖人に四角に座る弟子があり　梅子
凡人でよし聖人でよし花を愛で　水客
聖人の教え先代まで守り　トメ子
聖人と云われて小金貯めており　酔升
聖人を生んだ村にも汚職あり　多久志
聖人はただ母をほめ父をほめ　雀踊子
聖人でなくてよかった父と飲み　珠笑
聖人のその目に紫の山ばかり　木耳
聖人のその一言へ寝つかれず　紅寿

## 席題「靴音」

高峰柳児選

午前二時どの靴音も酔っている　十九平
カツカツカツ合格らしい靴の音　東雲楼
後から来る足音は痴漢めき　柳宏子
百点のテストへはずんだ靴の音　正朗
軍靴ひびかせ征った夫のそれっぽち　痴亭
靴音も御機嫌らしいボーナス日　柳宏子
靴音を信じてドアをあけに立ち　潮花
靴音の重さを知った失意の日　俊介
靴音は似てたがもうその人いない　弘生
靴の音きいて病人らしくする　花梢
気を使うその靴音に犬が吠え　吸江
靴音の乱れて病室灯がともり　与志
靴音も都会の歌になる舗道　凡九郎
警察で聞く靴音が大きすぎ　豊太
靴音も一人ではない尾行　鉄児
個性通りの靴音になっていた　古方
豆靴の音から和む老夫婦　紅寿
神域を出れば靴音コセコセし　朽泉
靴音でお出迎えにも差をつける　不清
しのばせた靴音砂利が承知せず　泉
靴音も揃いふたりまだ歩き　金魚
好郎

靴音が違うと妻の耳確か　奇童
アベックへ靴音高めたパトロール　十九平
おしのびで来る靴音へすっとあけ　梅里
太陽へ走る砂丘の軽い靴　天樹
家近しと靴のリズムに気をつかい　句楽坊
差がない帰りを告げる靴の音　すゝむ
規則正しく定年近い靴の音　久美子
水溜りよけて靴音酔うていず　白溪子
腕章の黒つけた日の靴の音　紅児
小柄にも似合わず靴音だけが派手　眉水
痴漢ではなかった靴音通りすぎ　恒明
病む妻が待つ靴音を整える　酔仙
靴音高く雪辱をした凱歌　梅里
靴音がぴたりと止んで恐い夜　清人
マイクへはっきり弔辞へ進む靴の音　万的
靴音末の子先きに迎えに出　笛生
靴音も派手にべんちやらついてく　たつみ
ハイヒール砂利踏む音も墓地近し　萬楽
酔うている靴音家を通り過ぎ　水客
せっかちな靴音パパがすぐ分かり　梅里
靴音をひっそりつつむ芝生踏む　与呂志
恋人と歩けば靴音まで変り　豊太
靴音も軽し句苑の砂利きしむ　章雅
靴音に鍵っ子の神経　満潮
靴音のせぬじゅうたん〜目出度〜日　金三
靴音がばたばたと来て振り向かせ　ユキ
玉砂利を踏めば神代の音で鳴り　野人
新品の靴の軋しみを振りかえり　スミエ
特大の御ヒップ靴音まで違い　十悟
すねに傷もって靴音におびえ　柳志
靴音を知ってか番犬ほえもせず　知恵
新婚の靴音今日を生むリズム　緑之助
観光の靴音を知る池の鯉　操子
無為徒食靴音ひそと家を出る　功雄
佳

追われる身わが靴音にさえおびえ　文秋
靴音の消えるを待ってこきおろし　光女
靴音で酔いの深さを見やぶられ　狂二
余憤去らずわが靴音を振りかえる　宣介
あやまると決めて靴音ためらわず　静馬
秀

自分の靴音におびえて曲り角　白柳
靴音高らかにライバルにすれちがい　集一
引きかえす　靴音ヤッパリ　金の事　不朽
自句

いらだちを　押える靴音　また違い　柳児

**席題「鐘」　三条東洋樹選**

陽にぬくい釣鐘　故郷に　知人無く　久美子
鐘のない　鐘楼　戦後　まだ癒えず　十九平
みおつくし　迷う　心を　引き戻し　鉄児
浮浪者に　関係のない　鐘が　鳴り　きさ子
三井寺の鐘夕陽にとけてゆく如し　栞
鐘ならしてから本職が身につかず　金三
鐘の銘　読みの下らぬ　まま　真昼　古方
教会の　鐘を　遊覧　バス　で　聞く　白溪子
千年の余韻で　古都の夜が　明ける　紫光
名鐘を　よろめく足で　撞いてみる　入仙
子を死なし鐘も寂しいものに聞く　明朗
うかつにも鐘を鳴らして掌を叩き　静水
分校の　鐘に　田植も　昼にする　きさ子
鐘をやめて聞いる鐘の音　章雅
おしゃべりを　聴きながら　旅人らしくなり　塊人
銭のいる　釣鐘　一つだけを　つき　義介
何処其処と鐘聞きわけて病んでいる　某人
鐘三ツ鳴らしてからのなれの果て　客遊子
だしぬけの鐘だ　女は手をはなし　小松園
鐘撞いた　余情しばらく　池に立つ　水客
御詠歌の鐘をトンチンカンに打ち　十悟
恩師への　慕情に鐘を　ついて見る　舟遊
みおつくしの鐘に良心揺さぶられ　紅月
サナトリウム明日も生きよと鐘が鳴り　史好

鐘つけば　二十円とは　せちがらし　秋月
開運の　鐘　十円　で　鳴り　響き　多久志
佳

もう恋が　早鐘を　打つ　初対面　酔夢
鐘の音　近所　年忌が　来たと　知り　一麦
逞ましき僧　鐘楼を　降りて　くる　天樹
母の鐘知らずパチンコ屋におぼれ　ユキ
鐘の音さらに身のおきどころなし　薫風
人

鐘の　鳴る方　へ　歩いて　旅らしく　水客
地

供出の　鐘　が　還　った　昔　の　音　没食子
天

鐘　一つ　個性が　有って　山を　ぬけ　太路
軸

朝の膳　客が　云い　出す　鐘のこと　東洋樹

**兼題「一　徹」　生島　鳥語選**

一徹の　双手が　膝を　ついて　いた　旭峰
老いの一徹歩こう会のトップ行く　恵二朗
臨終へ　来て　一徹に　悔いが　なし　久米雄
馬鹿野郎明治の何処が気に食わぬ　柳下
一徹の　女子　優先が　気に　食わず　柳志
一徹と添うていつしか吾れもまた　きさ子
一徹の　思慕が　夜霧の　駅に　立ち　奇童
一徹が　座り直した　の　み　事　一麦
一徹　な　お　師　は　ん　は　丙午　太路
事芸になれば　好々爺とも　いえず　柳宏子
一徹へ　育つ　孫弟子　曾孫　弟子　日満
老優の一徹　その目が　美しい　一三夫
子に叱られて　一徹の　ひとり言　野人
一徹を　意識　四十に　妥協せず　舟遊
一徹者らしく眉毛くしゃくしゃと　いわを
うるわしい一徹　義母を　立て通し　不朽
一徹な事掌に　途中で　降ろされる　秋月
その一徹故に　仕末書まで　とられ　古柳史

一徹へ　今朝もきれいに　花が咲き　某人
一徹の　一喝　怖い　第二案　修三
かちとったポスト一徹なればこそ　祥月
一徹の　口を　封じる　役を　付け　幸雄
銭金が　なんだと　一徹　譲らない　眉水
一徹な社長もアカハタもて余まし　不水
一徹な　父は　喜劇と　気が　つかず　魯木
ご先祖の家　一徹の　立退かず　豊太
来るところまでくれば一徹見直され　萬楽
機嫌よく　一徹なにか　一人ごと　古方
一徹であるが　わからぬ人でなし　雄峰
ふりきって　去ぬ一徹を　羨まれ　阿茶
一徹が　勲章　までも　する　辞退　一高
一徹の　父祝　言の　席に　出ず　柳太
一徹のうま味　森繁　ここに　あり　愛鳩
一徹さ　五十に　深む　日日　多く　千翁
一徹なとこが好きやと娘が申す　光女
一徹の父　一徹の僕にした　あいき
一徹に　明治の　母は　飼育され　春己
一徹が　親睦　会を　司会する　一栄
母だけが　知る　一徹な父の　肚　小茶坊
一徹な　明治へ　妥協せぬ昭和　清人
父の娘だ　見合い　頃として　拒み　美房
一徹な　父にもあった　ローマンス　春巣
一徹が　轆轤と　共　呼吸する　多久志
一徹な　笑いが　喉の　奥に　する　久美子
血液型へは　一徹を　通されず　水客
名刀の　如く　一徹　いさぎよし　白柳
一徹を　自画　自讃　して　平社員　与志
がたがたの入歯で一徹まくしたて　保夫
一徹が　自慢　内科医　まご　つかせ　柳児
一徹な　父の　気性へ　みな　黙り　千梢
一徹な　若さを　別な　目で　買われ　梅志
一徹を押え　子のため　手をつかえ　緑之助
小松園

古稀近し父の一徹通しとき　好郎
一徹な女だんだん怖くなり　十九平
再建をした一徹を敵も褒め　永断
一徹な髭がしんだ金のこと　大八
あわれまれつつも一徹押し通し　修
一徹を人事課長ももてあまし　弘生
一徹に打つ杭二人ばかり立ち　木耳
お怒りのとけず一徹老い給う　静水
肉親の縁に一徹薄く生き　久五郎
一徹さドラマにも似た俺と妻　きはち
一徹のしわもほころぶ叙勲の日　清泉
ペーソスもある一徹にさからわず　俊介
一徹な汝臣民紀元節　東洋樹
経歴が良すぎ一徹なおあわれ　鳥語

## 兼題「天井」

（代読・増井不二也）

### 椙元紋太選

天井のしみも見慣れた無事な日々　小松園
天井絵　観賞をして頸が凝り　光郎
天井を賞め々々祝儀の膳に就き　与志
上段に寝て天井に手が届き　静馬
天井の鶴の善意に励まされ　清人
天井を見つめ意見はきいとらず　芳子
天井張やっと家らしゅうなってくる　光女
愛の巣は低い天井で雨も漏り　酔夢
天井の埃りは先代からのもの　一声
天井へ宿敵を描き明日へ寝る　旭峯
天井も見て定年は辞めて行き　柳志
天井のやもりがないて驚かせ　へとち
天井へ女は意味のない迷い　舟遊
天井まで拭かされてるアルバイト　箱八
親ゆずり天井向いた鼻でよし　正朗
天井に友の情けの護符拝む　眉水
寝ころんで何もいらない青天井　不水
森閑として天井へとどく米　木耳
天井の高いロビーにくつろげず　久美子
天井に煤けて福笹ぶら下り　形水
住
天井の低さ猫背で住み馴れる　柳児
天井を見上げる若さをふと憎む　大八
青天井二人は夢を語るべし　凡九郎
地震かとすぐ天井へ眼を向ける　義介
絵天井説明団体客の鼻の穴　魯木
宿直しみじみきたない天井だなと気付く　万的
天井にイリコが吊ってあるゆとり　静水
天井の解説済むまで皆仰ぎ　多蘭子
有るも無きもみな青天井の下に住む　多蘭子

選者吟

天井にしにせのひかる焼鳥屋　紋太

## 選者のことば

川上三太郎

七月の句会は麻生さんの一周忌である。何とかして参加したいと考えたが上半期はすでに新潟、青森、新潟、福島、岩手と毎月旅に出た。下半期は八月から去年約束した北海道青森、宮崎、新潟と十月まで出歩かなければならぬ。せめて七月ぐらい安静にして下さいよ—と医者に言われた。この際医者に憎まれては身体が持たぬ。残念ながら七月いっぱい静養ときめた。そしてその事その事と医者を悦ばせた。そのために七月の会には出かけられない。ひたすら御寛容たまわりたい。

句題〝雲〟は俳句に沢山詠まれている。然し川柳の〝雲〟は俳句の〝雲〟とことなっていなければならぬ事は当然で、同じ若しくは劣っていたのではいやである。そこで少くとも俳句の歳時記の中から〝夏の雲〟ぐらいのところは一応眼を通してから川柳に書くべきである。

夏雲に鳶の翼の真ッ平　鳳雲子
夏雲群るるこの峡中に死ぬるかな　野笏
空はさむ蟹死にをるや雲の峰　碧梧桐
大阪や煙突に立つ雲の峰　古白
積乱雲手中にしかと聖十字　晃典
おんおんと恋がすす猫雲の峰　静塔
私の選句全部が必ずしもこのあたりの句より優れているとは云わない。各位の鑑賞と批評を待つ所以である。

選者の句

慄き逃げへただ炎天と雲一つ

## 兼題「雲」

（代読・脇田梅子）

### 川上三太郎選

クレヨン画雲なき空の翳りなく　ゆきお
紫に雲を描いた子の主観　恵二朗
持って来てチョコンと置いたような雲　七面山
雲垂れて星はお化粧してるらし　千翁
ハイキング相手になるな雲の峰　義一
湖の雲もやっぱり動いてる　竹荘
つり橋を渡れば雲がのしかかり　柳志
家出するほかなき丘の雲流れ　野人
空の旅損したような雲ばかり　雄峯
雲にしてみれば雨となり落ちるなら　孚彦
ロケット雲フワフワしておれず　梅里
降りそうな雲へ旅装を重くする　釣童
戦争のない晴天の飛行雲　緑之助
忙しさ雲を見上げること忘れ　紫峰子
正確に空を描く子に雲がない　修
風に鞭打たれて雲は駈けに駈け
準特選
雲の峰しんしんしかとあるいのち　不朽
童心の夢雲に乗る花の種　竜子
座り込み思い思いの雲を見る　漫多郎
透く傘で支える雲の重みなり　久美子
悔いある日雲の白さがまぶしすぎ　きはち
特選

雲ほめて 愛の言葉を ひそませる　柳児
駈けっこしているぼくの雲君の雲　春己

## 兼題「髭」　麻生 葭乃選

会場で発表した中から再選してこれを誌上発表といたします（選者）

洋行のみやげに残す おちょぼ髭　義英
面影は 髭を延ばさぬ 方でした　湖平
家内には 髭の威嚇も 通ぜざり　俊爾
不精髭 病気と 見せて 胚囓り　自生
女房に 髭の延びたを 注意され　長
貫録と アクセ 兼備の 髭のばし　亀一
髭ぬきつ 傷寒論と いうを 読み　痴亭
チョボ髭を つけて舞台の 高利貸　〆女
髭取ってどうも間伸びた顔になり　形水
父ちゃんの髭のむかしを子に問われ　釣童
髭剃れば若こうなったとひやかされ　没食子
髭白く 苦節の 過去を 語り つぎ　味平
白い髭 少し交って 慌てない　いわを
髭 立てた友 懐かしき写 真帳　佐保蘭
亭主族 いまは威厳も 髭もなく　千夏
髭の濃い 貫録二代目 良くささえ　草春
職長の 髭へ見学 かしこ まり　保夫
髭のある 集金人の 愛想よし　春巣
道化師の髭はちょぴりつけられる　小石
アルバムに 父 若かりし 頃の髭　多久志
かにかくにトレードマークとなりし髭　栞
髭剃って 再出発の 職に 就き　小松園
再出発 おやおや髭を たくわえて　梅志
肖像へ ああそうだった 髭を書き　白柳
ビールの泡つけてチョビ髭を喋り　梅里
恥をかくための髭ではなかったに　文秋
義理のある葬式ひげはそってゆき　好郎
病床の髭 ぼんぼん と思われず　集一
商人と なって 自慢の 髭を 剃り　富久一
勝運にのってる髭を 剃り惜しみ　清人

傍系会社へすべり込む 髭おとし　古柳史
猫の髭 引張って みる 日の 無聊　藤波
その髭が 近寄り難い ものにする　庸佑
はったりの髭もセールス板につき　柳太
似合わんかなぞと嫌らし髭をおき　日満
先代の に髭 赤字を見下され　柳志
髭の濃い 女形と見せぬ 牡丹刷毛　阿茶
無精ひげよほど急いで来たデート　久米雄
応援団 新入 生の 髭にほれ　良夫
盆栽のポーズになって 髭をなで　不水
まだ生きている 死水を とった髭　大八
云い勝ったあとのさびしさ髭をなで　一三夫
バラ色の 日日へ 毎日 髭を 剃り　幸雄
教祖 なお 時代錯誤の 髭を たて　十九平
髭のない秘書がでっぷり派手に肥え　峰子
口髭も 一ト役 買うた 総会屋　吸江
マンションに住んで毎日剃らされる　圭井堂
髭だけは 誰も守衛と 見てくれず　静馬
ご返盃 髭の 旦那の 名で呼ばれ　琴女
ジンクスの髭勝つまでほっとかれ　露芳
役者 名利 明治陛下 に扮す 髭　きさ子
男 くさく 成り 長 男 無精 髭　雄峯
スタミナはまだ負けぬ気の髭を染め　萬楽
パパの髭 落して ほしい 多数 決　美房

五客

黄泉の 旅の 支度も 髭 をそり　初甫
髭剃って花緒のきつい下駄をはき　雀踊子
雨と云う 予報ともかく 髭はそり　修
妻はもう 諦らめている 無精 髭　花梢
お馴染みに 呼ばれ仏の 髭を剃り　滋雀

人

男にも 素顔が あった 無精 ひげ　柳下

地

亡命の 悲願剃ろうと せぬくらし　木耳
天

不機嫌の何処へ行く気か髭を剃り　東洋樹

★**出席**―白柳・不朽・甦光・紅児・与呂志・多久志・柳宏子・一栄・正朗・清泉・薫風・圭井堂・水客・千梢・文秋・八郎・恒明・小石・トメ子・生々庵・すゝむ・形水・清人・一三夫・忠雄・栞・好郎・静水・静馬・竹荘・梅志・酔仙・泡水・野人・貞山・笛生・小松園・潮花・萬楽・いさむ・佐保蘭・眉水・仙山・良夫・明朗・村雲・塊人・無鬼・春己・緑之助・紫光・古方・柳児・春巣・玉青・阿茶・酔升・鉄児・奇童・甘草・吸江・永断・東雲・楼太郎・正夫・狂二・甚太郎・操子・梅子・舟遊・杜的・九平・客遊子・専翁・たつみ・摩天郎・白溪・介・豊太・柳志・柳太・透・大八・双楽・珠笑・野迷路・静歩・万的・三司・昇・金三・きさ子・句念坊・梅里・以兆・喜風・天樹・雀踊子・葉平・宏子・与志・葭乃・アート・酔夢・紅・寿・言也・あいき・花村・季賛・痴亭・金魚・いわを・句楽坊・有子・一二也・スミヱ・没食子・紅月・雄声・入・仙代・一麦・久米雄・四郎・一喜・紫香・秋月・弘生・光女・起志乃・竜子・凡九・仙・宣介・花梢・照一・一舟・十悟・郎・露芳・すみれ・かつらぎ・某人・太・東洋樹・ユキ・烏荘・久美子・集一・生長・路・俊介・潤潮・弥生・章雅・史好・功雄・奈々・凡子・雄峯・鳥・語・左久良・風来子・葉子

（順不同・敬称略）

★**御供料感謝**

番傘川柳本社、ふあうすと川柳社、脇田勇、高峰柳児、三条東洋樹、小西無鬼、むらくも川柳会、市岡暁舟、櫛部いさ夢、隠岐不酔、杏林川柳会、川柳塔婦人友の会。祖供養として麻生アート、ほかに北川春巣、榎田竹林、吉田圭井堂、小川恒明、若本多久志、中島生々庵。―**川柳塔社路郎忌川柳大会委員**

# 月見の宴も外人に解る

## ―ブラウン夫人と語る―

阿部佐保蘭

いま巴里へ美術視察に行っている妹の阿部淑子の紹介で、ドイツ系米人ボンネット・ブラウン女史（詩人で画家）に横浜の妹の渡欧前の個展の開かれている松屋前こいち画廊で、妹の勤務先の神奈川県立社会教育会館々長磯崎健之助氏（元慶大講師）の通訳で対談した。初対面というのに、非常にうちとけた対面で、終始ユーモアと快い笑の中に終始した。その対談の中で、私は、昔の日本人が年中行事のように試みた月見の宴のことに就て尋ねてみたところ、彼女はそれが、分ると云うはっきりした答えに驚いた。

嘗て私が最も尊敬する川柳の大先輩でもある井上剣花坊先生の弟子の今は亡き吉川英治先生の「外人には恐らく日本人の試みる月見の宴は判らないのではなかろうか」とのお言葉であった。これは明らかに時代の動きというか、外人と云ってもピンからキリまであるということであった。私は私の著した川柳句集『鶴の姿』を英訳川柳を添えてプレゼントしたところ、大変な喜び方で、その当時禁煙していた私に、あちらの香り高いタバコを心をこめて差し出された。余りの嬉しさに私は妻の怒りを忘れて思わずもその一本を物の見事に喫んでしまった。しまったと思ったが、あとの祭でその後又もとのもく阿みになってしまった事には、我ながらだらしないと心ひそかに彼女の好意を憎みたいような心に今これを記しながら傾きつつある。

余談はさておき、こんなことから、先月本誌に小生が執筆した『米人の英詩川柳』とも思い合せて、これは訳しようによっては、川柳も亦浮世絵同様に外人にも理解されるのではないかと思い合せた。昭和三十八年十一月十日の朝日新聞に、大阪外大英文学担当の講師であられる本多平八郎氏が『万葉集の英訳を完成して』と題して執筆された一文を（その新聞の切抜を私の切抜帖から見出して、前から一度機会があったら、麻生葭乃先生に書写して贈りたいと考えていた。そのチャンスが来たような気がして来たので、少しこのところ公私共多忙で疲れ気味ではあるが、勇を鼓して書送らせて戴くことにした。

下手にアレコレするより、いっそそのまま書写しますから、葭乃先生からこれに対する御高説でも生駒の心憎いばかりの隠棲から漉かせて戴けたらと、彼の地に思いを走らせつつ、この一文を次に筆写させて戴いた。即ち「私が万葉集の英訳を始めたのは、今次大戦のさなか、岡山に疎開した時からである。今日迄で二十年。だが、勿論、和歌をどういう形式で、英詩に直すかという腹案に費した時日は、それよりずっと長くなる。ロシアの日本文学好きな婦人が、四十年かかって今年中に万葉二十巻のロシア語訳を出されるそうだが、この四十年は日本語の勉強に要した時もこめてのことだと思う。又、私と同じく全巻英訳に取組み、近く完成するといわれるオランダのピアソン氏の場合も、そういう計算でゆくと、十五年ではなく四十年余になるであろう。私の狭い見聞によれば、岡田哲三、宮森麻太郎のような訳者もいるが、多くの場合短歌は外人によって外国語に移されてきた。彼らは概ね、短歌を五音節、七音節、七音節の五行に翻訳している。この形式で私の好きなものは『武士道』の中にある新渡部稲造の「敷島の大和心を人問はば、朝日に匂ふ山桜花」（筆者曰く私もこの和歌は大好きで私の閑居を桜花洞と名づけている程である）の名訳である。私も万葉集の中の二つの歌をこの形で記している。けれども、この形式の英訳

が適する短歌は少ないと、私は思う。それは英詩のリズムと和歌のリズムとの相違から来ている。余り専門的になるので、ここではこれに触れないが、この事は英文学者竹友藻風も、氏の『短歌英訳論』の中で書いている。

氏は、長歌は論じないが、短歌は四行に英訳すべきで、一行は三行、二行は四行と韻を踏むべきだといっている。私の考えも大体氏の意見と同じで、そのような形式で、小倉百人一首、与謝野晶子、若山牧水、石川啄木らの歌集を英訳している。ただ万葉の中には、四行に訳出するだけの内容のないものもあるので、そういうものは二行に記してもいる。次に万葉集の英訳に当って困ったことは、地名、植物名など、英語に乗らないものが無数に現れることであった。

この和名を続出させると、英語ではなく、日本語を読んでいる感じを起させる。ところが地名は色々な連想を起させる、詩にあっては重要な部分である。こういう点が翻訳不可能論者達の強い論拠になるのだろう。私はこれを出来る限り、普通名詞の山とか川とかに訳出して、時に「注」で断わっている。それから、色々な学者の訳注を見ても解らないものもある。

一例をあげると、巻七の冒頭に現れる「天の海に雲の波立ち月の船星の林にこぎ隠る見ゆ」の「林」である。注訳者によれば、この林を木の林と解して、海の中に林があるのはおかしい、歌自身も悪いといっている。私はこれを

Behold' the waves of cloud are seen upou the sea of heaven, and the moon, a ship, goes sailing amid the islands of the stars!

と「林」を「島々」として訳した。勿論、林に島という意味はないが、私は柿本人麿が星の群れている間を月の船が通って行くという意味で、林という語を使ったのだと独り決めしている。そして、海に関連した島で、詩全体のイメージを壊さないようにした。

こうして英訳して見ると、決してこれは悪い歌ではない。先日も京都に来たアメリカの女流詩人に見せたところ、後日この詩を写すのを忘れたので、書き送ってくれといって来た。『

ここまで書いてきたら、丁度電話がかかって来て、思いがけぬ北米の大江孤舟君が、今アメリカから見えて、高円寺の岡本時計店に居られるとのこと、早速ハイヤーを拾って出かけたところ、山口県から見えた弟さん、横浜から見えた弟さん、岡本社長夫妻にとり囲まれ、年よりうんと若い御当人が、にこやかに迎えて呉れた。

彼は他人の句は英訳せず、もう自分の川柳作品を、日本語がだんだん分らなくなる孫のため、子孫のため英訳しておくという、しっかりした頭脳の持主である。初対面の挨拶もそこそこに、柳談に英訳論に話の花を咲かす。岡本さんは山口県萩市の方で、井上剣花坊先生と同郷、東京でも同じ高円寺と中野大和町（井上剣花坊先生のお住居）の近くにすんでおられ、垂涎ものの剣花坊先生の色紙や短冊を沢山もっておられ、それ等を出して来て親切に見せて下さる。自然話は話を呼んで川柳の花が咲く。最後にジョーヂ・大江君に色紙に左のような英訳川柳を書いて戴く。

うれしき極みではある。

男だけ残り話が生きて来る　　孤舟

Only men are left;
Conversation becomes lively.

その秘密灰皿だけが知ってゐる

Whatever was said at that time
Only ash tkays know.

ところが驚いたことに、川柳塔のNO・5を見せたところ、拙稿「北米の英訳川柳」の中に大江孤舟とあるのは、全部自分でないとのこと、それでは誰の英訳で誰の句だろうか。小生の想像では恐らく原見春兆氏の英訳で句主は別のような気がする。それとも誰の英訳で誰の句か、改めて左に示しますから御存知の方は教えて戴きたい。即ち

過ぎて行く日々を無言に鏡見せ
青空の心になってやり直し
さげすんだ金に本心見破られ
労働は神聖にして靴の泥
追求の果てが自然の二字に尽き
盆栽に犯す曲りを神許し
ボーリング離れた球へ掌を合せ
害虫は何故殺さるか知らず死に
入口も出口も迷う高速路
愛すれば愛にこたえて花の色

（川柳戦国志・三）

# 武田信玄

(2)

冨士野鞍馬

## 塩

「日本外史」に「信玄の国は海に浜せず、塩を東海に仰げり。今川氏真と北条氏康と謀り、陰かにその塩を閉じぬ。甲斐は大いに困しめり。謙信は之れを聞き、書を信玄に寄せて曰く、「聞く、氏康、氏真は君を困しむるに塩を以てすと、不勇不義なり。我れは公と争えども、争う所は弓箭に在りて米塩に在らず。請う、今より以往は、塩を我が国に取れ。多寡は唯命のままなり。」と、乃ち賈人に命じて価を平かにして之れを給せしめぬ。」と書かれてある。

せちからひ軍さ北条しほをとめ（八四3）

越後から塩の廻った甲斐もなし（五九16）

いい甲斐のなさ塩の恩水にする（八一22）

甲州は塩もぼさつの数に入れ（拾三）

やき塩は信玄きつい奢りなり（六32）

しほたわら柿やぶどうの戻り足（安六宮1）

などと、越後から塩が供給されたことが詠まれている。

## 盲人追放

信玄は、領内の盲人を間者であるとし、悉く追放または殺害したので、盲人虐待者とされている。これは父信虎がしたという説もある。川柳は信玄説をとり、穴埋めにされたとして多くの句を詠んでいる。

穴山がうめるそうだん相手なり（一五23・八六27）

穴山が門へ座頭のじゅずつなぎ（天五信5）

三ツロで下知かと坐頭はらをたて（拾五）

穴山梅雪は信玄の姉の子で、山県昌景が兎唇であったので三ツロと、いずれも信玄の重臣を想像して詠まれ

そがの世にいじめた座頭埋められる（六29）

曽我五郎の生れ変りをほのめかし、座頭の高利貸と貧乏曽我に附会している。

信玄はしこたまかりてやきころし（拾六29）

信玄公は名将とかりたやつ（三九15）

借りた奴等が信玄をほめるなり（安六智6）

江戸の盲人は高利貸と川柳ではきめられているので、いろいろに仮定して作られ

座頭ども高利を取った甲斐もなし（傍二13）

その時の座頭は蓄めた甲斐もなし（宮四4）

やけ死んで丸い小判の高利なし（傍三44）

等の句もあり、「丸い小判」というのは、信玄が造った小判で、徳川時代にもあった甲州金という丸形の小判である。

杖をとりあげはうりこみはうりこみ（一九20）

信玄は跡から杖を千本くべ（三二19）

つえぐるみやけと信玄下知をなし（明四智1）

これらは杖で盲人を現わし、また盲人はたいてい按摩を業とするので、

信玄のざい世あんまに事をかき（三二39）

あんまはうづめけんぺきは越後勢　（四八7）

甲州は針やあんまに事をかき　（五12）

一国成敗按摩が一人なし　（二〇12）

信玄公のけんぴきは張らぬなり（傍四22）

などの句があり、「けんぴき」（痃癖）は肩のこりで、癪の種という意にもつかわれた。

手引をも皆追出せと三郎兵衛　（五二30）

三郎兵衛は馬場信勝。

めっかちは大事盲目はむごくする　（二三23）

びっこめが下知かと座頭くやしがり　（四四26）

片目、跛は山本勘助。信玄に招聘された軍師である。

信玄はかわったものを目の敵　（四一7）

にへゆよりひどくしたのはかいの国　（二一22乙）

目にものを見せずに甲斐でうずめられ　（八七16）

信玄の時代かないませぬめくら（三八8）

甲州盲目正真の土左衛門　（一三〇11）

一国は祝いをねだる根をたやし（二〇15）

はなねじりばかりがねだる甲斐の国　（一七34）

祝い事があると盲人が祝儀をねだりに来た。また非人頭もねだりに来た。それが持っている十手の様な拵物を「はなねじり」といった。それで盲人がなくなって非人頭だけが来ると詠まれている。

一国はむらさきを着る根をたやし　（天五松1）

紫衣を着るのは盲人の最高検校。

ごぜといふごぜ甲州を夜にげする　（一五10）

ごぜ（瞽女）は女盲人である。

甲州へ遣るぞと座頭なぶられる　（明五松5）

と、江戸の盲人はなぶられたかも知れない。

始皇は四角甲州は丸く掘り　（九九37）

あいたのとないを和漢で埋る也（五七2）

ありゃこりゃなものを始皇と武田埋め　（コリ三23）

二千人唐と日本で埋められる　（四七32）

秦の始皇帝は、書を焚き、儒者を穴埋めにしたという。それと並べて信玄の盲人追放が詠まれている。俗諺に「めくら千人めあき千人」というので二千人と洒落て、目明きは儒者をいう。

## 三年秘喪

天正元年（一五七三）信玄は、織田信長と決戦の途、三河の野田城に菅沼新八郎を攻め落城旦夕にせまった。城中に芳仗という笛の名手が居て、毎宵城楼で笛を吹奏するので、信玄も一夜その妙音に聞き入った。その時敵の軽部太郎兵衛の銃丸にあたり、落馬したのが因で、甲州への帰途、信州伊那郡駒場で死んだのである。時に五十三才であった。

菅沼を見くびり馥にあてられる（八一20）

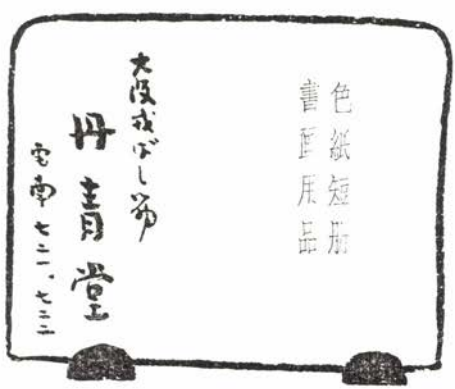
馥の異名はあたるので鉄砲という。

聞甲斐のないは哀れな野田の笛（七六32）

御太鼓で逃ても笛で最期なり　（七七36）

息キの音も留ルもしらず野田の笛　（八二30）

聞人の息キの音止メた野田の笛　（一一七22）



# 明治川柳と風俗（13）

奥津啓一朗

## 法界屋

痴髪不破の関屋の法界屋　とんこ
法界屋鴛鴦で廊をねりあるき　梅舟
法界屋女の唄の哀れたり　柳影子
かすれかすれに生業の唄を売り　角恋坊

主要楽器であつた月琴が、この楽器のエキゾチックな興味から、日本の三味線と共に、庶民に愛好されていたという事もあり然も法界屋が此の中国の楽器を提げて抬頭したことは、忽ち尨大な勢力となり、日本国中にホーカイ節という流行歌を行き渡らせた一因であろう。

法界屋琴をコラサと背負つて来る　ふくべ
手袋の指先を切る法界屋　天涯子
法界屋うるさい程の供が附き　可睡坊
法界屋手当り次第歌にする　金花

法界で切なる胸は歌はれず　剣花坊
法界の附髷で来る花の山　蔦雄
花の茶屋法界が来て尻を向け　同
法界の時雨て通る辻の闇　琴丸
法界と親類になる浪花節　金比古
法界が仲間と思う浪花節　張六

このホーカイ節は清楽「九連環」が長崎に渡来して、当初「長崎節不開」が生れ何時ともなく、不開（ホーカイ）の囃子詞から、ホーカイ節と呼ばれるに至つたのである。

音に聞ほれて咽ぶえを討ぬかれ（八九30）
信玄も鉄砲疵はひしかくし（六四19）
川中の武勇も野田の水の泡（一六五26）

などと野田城の笛が詠まれている。

信玄は死にのぞみ、「三年間喪を発するなかれ、三年の後、石棺を作り、ひそかに諏訪の湖心に沈め、然る後喪を発せよ」と命じたといわれているので、これも川柳に詠まれ、

三年もかくしおふせたかいはなし（安六天1）
信玄の遺言魚鳥留はよせ（五四22）
信玄は死んでも年を三つとり（八六39・一二八46）

たけ田のからくり三年ひしかくし（一八12）
とんだ事座頭ならびに魚鳥留（一九ス10）
魚鳥留メせぬのは甲斐のはかりごと（天元礼1）

魚鳥留とは精進食のことである。

甲斐玉で三年たもつ法師武者（五四42）
四りん車にしやうよふ軒をのせるとこ（安七礼5）

三年間喪を秘して、その間、よく似た弟の逍遥軒信綱を、信玄と称して人に会わせていたといわれている。四輪車は、孔明がそれに乗って采配を振ったのである。

信玄の生れ替りはふてへやつ（三一32）
強賊石川五右衛門は信玄の生れ変りという俗説もあつた。
信玄のあたまのとこへ香の物（三四28）
信玄弁当車座で手習子（一二二12）

後世、信玄弁当、信玄袋などにその名が伝わつている。

死から逆算すると、信玄は、大永元年（一五二一）辛巳の生れということになり、大正三年（一九一四）に、正三位を追贈された。

信玄の死を聞いた上杉謙信は「我が好敵手を失えり。世にまたこの英雄男子あらんや」といつた。（日本外史）

—大陸放浪—

# ノモンハンの酒

東野大八

私は幼少五歳の折、つくり酒屋の仕込みダルの中に転落、雨水がたまつて酒と化していた、黄金の泡水の中でグロッキーになつたことがある。爾来、きわめて酒に強くなつたという次第なのだが、時折、その酒の酔いの底に、一望はるかなノモンハンの海のような草原を想い浮かべる。

ノモンハンは、外人記者団一行にまじつてハイラルからノムトソーリン、ガンジル廟、将軍廟、ハルハ河、ノロ高地と回つたが、私は片道コースが終ると、単独行動をとり、ノムトソーリン近くの飛行場で数日を過した。

この航空部隊は、当時ノモンハン空中戦の花とうたわれた日本のリートホーヘンこと篠原準尉を持つ野口部隊で、ハヤブサ戦斗機隊の基地であつた。

ここで野口部隊長とのインタビューを終えて、私は当時の大衆雑誌〝キング〟から依頼された内職原稿の取材のため、飛行機に乗せて頂きたいと懇願した。当時は、地上戦ではガタガタに敵戦車に痛めつけられていたが、空の方はこちらが優勢だつたので、どうやらその念願がかなえられた。

ただし一人だけ乗せると、他の記者連中がウルサイからと、野口さんは五人の記者連の有志を乗せるという名目にしてくれた。

ところでその血気の五人の中に、満映ニュースのカメラマンの池田というのがいた。私の飲み友達である。

それがくじ引きの結果、隊長機に乗るのを引き当てた。ところがヤツコさんひどくシブイ顔をしている。集りのあと私をつかまえ

「おい、頼むからオレの飛行機とお前の分を交換しろ」

という。イヤだ、と私は初手断つて、ただしウイスキー一本なら折りあつてもいい。と鼻の下をこすつた。彼がジョニーウオーカーを二本、懸命にいんとくしていることを、私はかぎつけていたからだ。

「そういじめるなよ、オレはアイモで、お前はペン一本じゃあないか」と根つからうんといわなかつたが、結局彼は仕事の鬼であつた。とうとうトラの子の一本と引きかえに私と交替機乗の約束ができ上つた。

さてその日は風もなく、至つて好天、彼は雀躍して私の乗るべきはずだつた六番機へ、愛機を抱き、白のマフラーをなびかせて機上の人となつた。それを見送り、私も隊長機に乗り込む。記者たちはこういう場合、すべて将校用の飛行服が借用できた。（当時私はこの飛行服の写真を沢山撮つて貰い、得意になつて秘蔵していたが、今は残念ながら一枚もない）

やがて離陸、忽ち高度四千メートル、北満の水のごとき青空の真つただ中へ、六機のハヤブサはへの字形の編隊をとつて飛ぶ。への字のとつさきにいるのが隊長機の私、池田はそのへの字の右端つこに乗つているのである つまりアイモを回すのに、端つこでないと、六機の雄姿が一コマの中へ収め切れないのだ。池田はその角度を計算し〝撃てし止まむ〟の闘魂を盛り上げようと考えたわけである

なるほどさすがは写真屋だ、と感心していたら、いきなりあたりへドカ、ドカときた。敵対空火器だ。ポワン、ポワンと煙がまずふくれ、それからオレンヂ色の火花が煙のシンでチカ、チカする。大分遠いのや、ぞんがい近くの辺で、丸くガン、ガン鳴るのもある。大して脅威ではないが、機が揺れるのには閉口した。

そのうち、私はアツとばかり両膝つつたて総毛だつたのである。当るとは夢にも思わなかつた、そうしたケムリ玉の一発が見事に友

# 戸倉普天氏逝く

清水白柳

戸倉普天氏は六月二十六日、阪大石橋分院で逝去され、本名誠司、明治二十一年二月二十六日生まれ七十八歳のご高齢であつた。心から御悼み申上げます。実業家としての普天氏は戦時中の日東紡産業の専務として綿業界のためにあの困難な時局に活躍して居られたことは周知のことであります。戦後は郷里兵庫県氷上郡氷上村の村長に推されてその激務をつとめて居られたこともあり、その後は裕々自適の生活を楽しんで居られたとのことであつた。

川柳家としての普天氏は、故路郎先生の門を叩き入門以来多くの柳人を育て、川柳雑誌不朽洞会の創立当初にはその委員長として、戦時中の川柳活動に、路郎先生の蔭の力となつて居られたことは、不朽洞会の会員としていつも感謝していたものであります。その頃にはペンネーム〝小山文三〟で多くの随筆を川柳雑誌にも発表せられています。その中でも「丹波の猿公、猪公」其の他などローカルカラーにみちたものでした。そうした随筆を一書にまとめて出版されたものが、「普天随筆」で、路郎先生が序文を書いて居られるのであります。

路郎忌を目前にして普天氏の訃を知り暗然としたのであります。普天氏の霊が天国に於て、故路郎先生と手を握り合って川柳を語られるでありましよう。そして吾々を見守って下さることを信じるのであります。

**路郎忌にまわりの星が一つ殖え**　白柳

合掌

軍の一機に激突したのである。アツといつたときは粉みじんである。シャーツとあえなくもろい器材の飛沫を散らせた。その黒い粉末状の屑（風防の透明膜からみた感じ）の中にもんどり打つて二つの影が、忽ちつぶてのように視界から消えていつた。直撃弾をうけたのは六番機だつたのだ。その二つの影の一つは、彼、池田君にまぎれもない。アイモをしつかと抱きしめた彼はみるまに白粉刷毛をサツとはいたような白い空間に吸い込まれていつたのである。遠く青い大地の奥底深く冷たくガラスのように光つているのはハルハ河だ

危く生命びろいをした私は、結局彼のウイスキーに手をつけずじまいだつた。彼の遺品の中に、その細長い角びんは、ゴボ、ゴボと彼のつぶやきのように動くたびに音をたてていた。秀麗なヒゲ面の彼の顔とは、およそその音は不似合なものだつた。

今は跡形もないが、岐阜市の盛り場を出はずれたところに、破れちようちんのむさいおでん屋があつた。油虫は多いが、安くてうまいし、第一場所が電車道近くなので、私は寸暇を惜しんでここへ入りこんだ。

ここは一徹ものおじいさんとおばあがいた。テレビの時代劇に出てきそうな町人、女将のなれの果てみたいな老夫婦だが、おばあとときに気が合い、よくバカ話をやつて、ガラス徳利のおかわりをしたものだが、ある日ふとばあさんが野口部隊長の話をした。

「あつ、野口さんはギフだつたの？」

と、私があつけにとられると

## 戸倉普天遺句

学会の権威猫背で親まれ
通訳が笑えば俺も笑つとき
靴下の片足づるも可愛らし
低い鼻工場一の働き手
花便り雪便り日本狭くなし
会議室女社長は座りたし
係りは居らんと新聞読みながら
親しめば土にはちつともうそがなし
半パンツ常務は鶴のような足
採算はどうあろうとも麦を踏む
コンクリートの隙にも草は生えんとす
美しい人乗つて来て京近し

村長退陣

郷党に余生捧ぐる愚を悟り
蓑笠で雨中の人となるもよし
急いで居るのにまだ支店長判押さず
我世では喰えそうもない柿を植え
いつの間にか書記長眼鏡使いだし
選挙違反事務長だけが引つ張られ

「なんの、息子が野口さんの部下で、ノモンハンで死にましたがナ」という。私はその一言で、一望の海の如き北満の草原を思い浮かべ、そこに乱舞する幻のハヤブサやサツポロビールのマークみたいなのをつけた敵エスペー（現地の呼称で、スケベエともいつた）の姿をみた。すると白セキの肌に口ヒゲの美しい野口さんの顔と、きんしを煙そうにくゆらせた池田君の紺色のセーター姿が浮かび上つた。同時に例の洋酒びんもぽつかり姿を現わした。その酒はあのときと同じに、とぷん、たぷんと味気なく私の胸底に鳴つていた。

# 近詠

大阪市　橋本緑雨

六月十九日伊豆めぐり
下田港黒船もみず平和なり
黒船のこけし一つがみやげなり
頂上は雨　峠は晴れ上り

長野県　高峰柳児

不渡りをつかんで誕生日など忘れ
堂々と生理休暇を無駄にせず
ブルトーザー痩せ地を生かす音で鳴り
たくあんを音で喰べてる母達者
正義観派閥の底で押えられ
手放しで欠伸孤独を埋めている

岐阜県　東野大八

棺桶に極上があり並があり
病室へ来た棺桶の美くしさ
ただ今は他人線香の灰が伸び

大洲市　米沢暁明

しばらくも一しよにいたい廻り道
糟糠の妻飛行機にするという
女史曰く嫁入りなんてあほらしい
お土産がそろい旅館へ引き上げる

石川県　山上千太郎

お祭りの日だけ降つて又晴れる
週六日いつもの椅子へかけに行く
この人は駄目だと答案紙が思う

今治市　長野文庫

立読む子帰る家庭が無いように
五万年位すつ飛ぶ考古学
視察団パンフレットで済むものを
よいものはすたらず売れる四書五経

名古屋市　長谷川鮮山

床の間にまだ両眼のない達摩
内職の方が大きい失保険
一日が終り静かなお念仏


路郎川柳手拭い
子沢山僕のまくらは何処へいた
定価　百　円
送料　二十五円

# 作句教室

研究題「ポスト」

清水白柳

今回も多数の御投句を頂いて有難うございました。早速句を見ましょう。

**好き嫌い言わずポストはみんな呑み**　千梢
**別け隔てなしに呑みこむ赤ポスト**　繁太郎
**喜怒哀楽へ表情変えぬポストです**　旭峯
**清濁を合せ呑んでポスト動ぜず**　千夏

こうした境地を詠んだ句は数多くあったがそのうちからこの四句を採り上げた。初めの二句はすらりと出来ているが、それだけに物足りない。好き嫌いと別け隔てという語はあるのだが、後の二句は僕が詠みそうな字句や構成なので驚いたが、よく詠みこなされている。

**今度は振ってやる手紙投函し**　徹也
**長い夢捨てる手紙をポスト飲み**　千代

いい便りを出すという句は多かったがこうした句は少なかったので目についた。振ってやるのだという作者の意気込も面白かったし長い夢捨てるというのも思い切りのいることなのだ。その淋しさがよく出ていると思う。

**何気なくポストは遺書を受取った**　雄声

焦点のはっきりした句はいいものだ。この句にはそれがある。作者の手腕だと思う。

**静けさはポストで雀ステップし**　瑞枝
**月の夜はポストも歩きたい心地**　秋月
**夕日背に一人ただずむポストわれ**　葉子

初めの句は都会ではなくて静かな町のポストである。その静かさを雀の状態によって表現しているのだ。次の句は静かすぎるような月夜であろう。感傷的な作者の眼を知ることが出来ると思う。後の句のポストわれという字句にも感傷がある。こうした作句法もまた捨て難い味わいがある。

**ポストまで来てから手紙思い出し**　露声
**ついでにと頼まれポストうかと過ぎ**　寿美司
**気がつけばポストはとうに通り越し**　みよ

思い出しの句は家から持って出るのを忘れたのであろう。こうした経験はだれにでもあることなので共感が持てる。ついでの句にはユーモアがある。そのまま持って帰るかも知れないのだ。通り越しの句にも面白さがあるいつもわたしはこの句の通りなのだ。

**投函の手応えあって安心し**　亜也
**いい便りポストへ軽い音を立て**　正朗
**開函の直後かことんと音をきき**　芳子
**投函の余韻しっかと抱きしめる**　不水

ポストへ入れたら音がしたという句は多かったが、四句だけ採り上げた。手応えということと、軽い音とがよかったようだ。空らになったポストへ入れると音が違うのだが、それを見つけたのが作者の神経なのだ。余韻の句には作句歴の長さによる手法が見られると思う。

**大通り犬はポストをちょっと借り**　清泉
**うさんくさげに野良犬が見るポスト**　砂生

漫画に描かれていることだが、この句にはいや味がない。それはちょっと借りという語に作者の働きがあるからだろうと考えられる。野良犬の句は作者がその犬の眼を借りて句を詠んだのが成功したのだと思う。


黄銅六角ボールトナット
及び特殊換物全般

合資会社 西出螺子製作所

大阪市天王寺区空堀町八番地
TEL (761) 三四五二 — 四
夜間 (762) 四四〇八

**託されぬレターポストへ一と走り　藤　波**
**逢いに行く便りはポストまで走り　酔　夢**

人には頼まれない手紙のことを詠んで成功している句である。託されぬレターという語も、逢いに行く便りというのも動かせない。

**ポストにも開けて見せたいいい話　睦　夫**
**なにワクワクしてるとポストに言われそう　章　雅**

自分の胸の中にだけしまって置けないようなうれしい話はポストにでも話しかけたい気持であろう。後の句はそれをポストの方から見て詠んだのである。

**御返事をポストへ祈るラブレター　湖　平**
**ポストにもお世話になった二人なり　竜　泉**

だれでも思いつくことは同じである、そこでその思いついた事を飛躍させて句に仕立てる練習をするのが課題吟のもつ一つの使命なのだと思っている。だからこの作者にはもっと大胆な句を作って見られるようすすめたい

**背伸びして投函るクイズに夢があり　与志**
**運だめし入れるポストを替えて見る　保夫**

背伸びしての句は現実の背伸びではないのだ、そこにこの句の面白さを見ることが出来る。運だめしの句はクイズ狂の心理をズバリとついて居て佳句だと思う。

**いれてから書いた文句が気にかかり　万竿**
**ポストまで来て決心がふとにぶり　花　子**
**背信をポストの前で躊躇する　要　次**

文句が気になるという句はよくあることで後味のわるい思いをするものだ。決心がにぶるという句は、うまく詠まれていていい句になっていると思う。背信の句は、背信という語が生かされていて、作者の進歩が見えている。

**やっと手がポストにとどく明るい目**　みやこ
**出張のパパへ抱っこで出すポスト**　凡九郎

こうした着想の句も多かったが、明るい目という作者の感じがよく出ているのでよいと思った。出張の句は出す手紙の内容まで想像出来るような温かい句柄になっているのが作者の年輪を示していると思う。

**先ずポスト教えてそれから三軒目**　正　直
**煙草屋とポストに近く閑かに居**　静観堂

ポストを目印にしたという句も多かったが、それから三軒目だという具体性をこの句は持っているのである。閑居の句には達観があると思う。何気なく詠んでいながら作者はそこに定着しているのを知ることが出来る。

**ポスト迄手当り次第履いて行き**　鉄　舟

日常生活の中からこの句材を見つけたのは作者の眼のたしかさである。佳い句だと思う

**満ち足りた心ポストを撫でて行き**　文　平

余程うれしいことがあったのだろう、ポストまで撫でたのだからネ。

**初投句ポストの前で読み返し**　紫

この句は初投句だからよかったのだが、ポストの前で読み返す句は沢山あった。

**急く心ポストに託しホッとする**　白　汀
**自分からポストに入れてほっとする**　弘朗

同じほっとするのにも、早く出してほっとするのと、自分が入れてほっとするのがある

**思い出のポスト故郷も変りたり**　秋　星

この句には二タ通りの見方がある。一つは郵便ポストで句にある通りであるが、もう一つは以前に勤めていた椅子、つまりポストという見方であるが、どちらにしても深さがないと言えるようである。

**出張の宿の浴衣で妻へ文**　痴　亭

ポストという字の入っていない句であるが、旅先きから出す温かい思いやりを知ることが出来る。

**火の玉もポスト素直にうけつける**　破　天
**火の玉のような熱裂な手紙というのだろう**
**うちのポスト催告書ばかりくわえて居**　八　郎

ハガキが入っているので取りに出たら催告書でがっかりした作者の顔が見えるようだ。

**酔どれの忿懣ポストは聞いてやり**　軒太楼

少し漫画めいた句柄だが、おどけていないのがよかった。併しこうした着想はなるべく避けたいものだと思う。

**駅前のポストへ早い朝を起き**　静　水

作者の生活の一とこまであろうか、ここへ焦点を合わせて詠いあげたのである。

**郵便料値上げポストは知らぬ顔**　春　雄

ポストに怒って見ても仕方がない。その憤りは無言のうちにはね返るのだ。

**雨の日のポストいたわるように入れ**　松風

作者のいたわりを感じさせられる句である

さて郵便ポストではなく人間の座、ポストの句を並べて見よう。

**このポスト汚職につなぐとは知らず**　清泉
**憧れのポストに平も胸を張り**　繁太郎

嬉しさに寝てる子にも言う社のポスト　睦夫
前歴が物言い顧問と云うポスト　与志
余生まだ顧問のポストある強味　酔夢
勇退の花道ポスト空けて待ち　辰始

最後の句は一番よいと思った。最後に捨て難い句を列記する。

人目引く程にポストへ日参し　千夏
ややこしい道ポスト迄又戻り　露声
ポストにも疎遠になって女老い　千代
ポスト今淑女の舌を見てしまい　秋月
叱られてポストの蔭で瓜を噛み　要次

それぞれの句はつかむものをつかんでいると言える。これで誠に至らないことばかりだったが、私の作句教室を終ることにしたい。永い間御声援や御鞭撻を頂き心から御礼を申し上げたい。淋しい気もするのだが、他に多くの仕事が待っているので、その方に力を入れたいと思っているので、何分にも御支援をお願い致したい。みなさんの御健吟をお祈りしてこの欄のバトンを渡すことにする。

十月号発表・締切八月二十日
研究題「思想」　五句以内
十一月号発表・締切九月二十日
研究題「親」　五句以内
宛先　大阪市阿倍野区王子町三丁目三四
菊沢　小松園

# 金泥集

「大柄」

バス旅行大柄の人の横きらい　峰子
大柄で知能おくれた子に困り　勝子
給食の効果か親の背丈みんな抜き　千梢
年がいもなく大柄を着てはしゃぎ　酔夢
大柄を乗せるタンカを耳打ちし　きさ子
大柄な娘の腰巾着になった母　千夏
バス旅行大柄同士肩が凝り　一栄
大柄のチェックが似合う八等身　阿茶
大柄を恥じた明治の祖母がいて　美香
大柄を買われてスターに引き抜かれ　鳴子
大柄も気にせずおしゃれ追う度胸　弥生
五客
大柄と云わず呉服屋気をきかし　きさ子

# 麻生葭乃選

縁あって蚕の夫婦になりました　一栄
大柄で可愛い色が着せられず　阿茶
大柄がかくした妻の曲線美　鳴子
任かしとは大柄たのもしそうに見え　峰子
人
大柄へメジャーグングン伸ばされる　きさ子
地
ゆかた会孫と一緒の柄を着る　小石
天
大柄の貫録みせた仲間もめ　小石
軸
大柄は四つ身仕立てにしてゆずり　葭乃

★おことわり
葭乃先生から10月号の課題がまだ編集部へ届いておりません。おからだのこともありますので、とにかく次号までお待ちください。

八月の句会

玉造川柳会
時　十日（水）午後六時
題　夜空・プール・こじれる
所　玉造交差点南一〇〇米　大阪信用金庫

南大阪川柳会
時　二十日（土）午後六時
題　予備・味方・小銭・パーティ
所　アベノ区松崎町三丁目一〇　大萬

# ギター

奥谷弘朗選

本性を　エレキギターに　みる思い　湖平
エレキギター僕の気性へついて来ず　季賛
ギター弾く　白衣　世相　遠く　生き　無聖
音痴にはウエスタンギターも磯節も　野迷路
騒々しいだけのギターを子が聞かせ　千代
休日の　雨を　ギターと　居る　孤独　勝子
骨までとギターへ三つの子も合わせ　井蛙
部屋貸してギター弾くとは知らんだ　光郎
どん底で流がしギターを聞く孤独　弥生
ギター激し　フラメンコ　狂い舞う　どんたく
ギターも　ひける　土工の　白い　顔　木魚
ギターから善意あふれる募金が出　保夫
勉強の二階　ギターが　もれてくる　愛鳩
恋をたギターはぽつりぽつり弾き　春己
古賀調の聞けぬギターにふと佗し　酔夢
エネルギーのぶつ場をエレキギターに　句楽坊
何になるつもりかギターばかり弾き　藤波
エレキギター三軒目から苦情来る　紫
哀調の　ギターへ虫も　負けていず　不水
足音が止まってギターやめられず　千翁
ギターソロ中気のように振る手首　涼人
うかったら俺もギターを買うてみる　可住
ギター　弾く　少女　淡い　夢を持ち　初甫
勉強を　してるに　ギター誘いに来　明朗
お目当ての窓が開かぬ日のギター　砂生
勉強部屋ギターも同居するゆとり　恵二朗
エレキギター若さが破裂した音色　凡九郎
引越しに末っ娘ギターだけを持ち　十九平
楽しみは夜学のあとで弾くギター　いさ夢
ギター国を亡ぼすような音を出し　多蘭子
故郷を捨てた　ギターへ　母を恋う　芳子
和洋合奏　漫才ギターが　踊り出し　正朗
下宿部屋ホコリかむっているギター　清泉
若人のパッションエレキがかきたてる　佳女

佳

ギターをとればなんにも残らぬ和田弘　七面山
艶歌師の落ち目ギターを質に入れ　鶴丸
つまびけばギターも泣いている出船　秋月
首ったけの恋はギターを首にかけ　代仕男
エレキギター　徴兵検査ない　日本　章雅

人

ハワイアンギターに乗って恋進む　恵二朗

地

家元が　隣りのギターへ　窓を閉め　十九平

天

執念は　月賦の　音で　ない　ギター　千翁

軸

恋心　ギター　爪弾く　日が　つづき

# 身許

大坂形水選

手不足に　身許　不問にした　不覚　明子
身許にはふれず神父の手がぬくい　旭峯
さりげ　なく　身許を　洗う　採用課　代仕男
身許聞かぬ約束飯場に住みついて　保夫
所持品で身許が割れたスラムの死　涼人
人手不足身許どうこう言うとれず　藤波
里親は　身許を　言わず　子を　育て　勝子
旅の　夜は　今夜　限りの　身許　談　秋月
どやの友身許は聞かぬこととする　どんたく
又　うその　身許へ　刑事　走らされ　水車
うそを言う身許が喉でひっかかり　春己
身許不明　もしやと思う　腰をあげ　みやこ
生きる為の身許かくして夜をかせぎ　鳴子
表彰の　身許　調査に　悪びれず　秀峰
訳がある　身許を伏せて　尼僧生き　幽谷
御迷惑　かけぬ　身許　へ　貰う　判　千翁
夕刊は　身許　不詳と　二三行　不水
身許保証　肩書みんな　書かせられ　紫水
恋人の　身許は　母が　調べてた　一扇
氏素性　金にかくれて　消えてゆき　美沙
投身の　身許　が　わかる　遺留品　初甫
気品とは　別に身許を　たしかめる　無聖
まだ　若い　寡母の　身許　秘密めき　千代
ひよっくりと身許がわかってくる資料　古方
身許引受けとった会社が潰れかけ　木魚
身許調べ　悪い予感が　あたってい　愛鳩
日航へ　身許はっきりさせて　乗り　涼人
複雑な　身許　異郷で　ひとり　ぼち　弥生
身許よし　人柄も　よし　母　のり気　佳女
身許では申分ないのは娘が好かず　弘朗
ばれそうになった身許が荷をまとめ　軒太楼

誰になと聞いてもらおと言う身許　凡九郎
善行の　身許　が　知れた　地　方　版　春　巳
記者だまり身許が割れて慌ただし　代仕男
心中の　身許が　知れぬ　荒　むしろ　宗太郎
立ち居から身許がばれて住みづらく　千　夏
助け合い身許もつげず置いてゆき　正　朗
身許不詳小さい記事になっただけ　芳　子
ありし世を　身許が明治　恋しがり　双　楽
ホステスが　話しがっている　身許　いさ夢
身許かくしておへんろ宿に泊ってた　古　方

人

身許だけ　調べて後の　沙汰がない　十九平

地

身許には　ふれず飯場の　賑やかさ　酔　夢

天

興信所　身許を　箇条書きに　する　恵二朗

軸

親戚の　端まで　身許　調　べ　に　き

## 汗

臼井　三林坊　選

汗っかき　焦れば　焦る　程　トチリ　紫
笑わせて漫才そっと　汗　を　ふ　く　明　子
鼻に汗して　一気に喋る　久し振り　正　朗
手で汗を拭いて米価のニュース聞く　涼　人
金の価値　知ったバイトと　玉の汗　竜　泉
汗の塩　まだ　なま　温い　柴　の　蒿　無　聖
連休の　茶店　うれしい　汗を　かき　千　代
田の土に　落ちる汗見て　悔はなし　野迷路
貧乏　働きする　身へ　汗　承知せず　季　賛
今日の汗ビールの泡と置き替える　どんたく
冷汗の　出るよな　話　持ち　込まれ　歌　子
目に汗が泌んでお金の値がわかり　藤　波
汗かいた　割に　仕事　はか　どらず　庸　佑
ハンマーの汗は珠玉となって散り　不　水
冷汗が　笑い　話　の　種　になり　百　酒
無我の境　汗そのままに　鉦だいこ　瑞　枝
いやがらせみたいに課長汗をふき　宗太郎
貧乏に　さからう　汗の　まだ　続き　可　住
渡す　メス　拭く汗　手術　まだ続き　李　朋
出鋼温度1000汗が作業衣突き抜る　鶴　丸
ふとん蹴飛ばし子は健康な汗を　祥　月
汗かかぬ　性と　監督　見て　くれず　代仕男
日本の　土に　アベベの　汗が　泌み　水　車
冷汗を　かいて　来ました　PTA　春　巳
この場だけ　逃れる嘘に　こんな汗　酔　夢
馬の汗騎士もいっしよになって　古　方
汗の　体験なくて　労働貴族　なり　十九平
善人の　小さな　嘘へ　こんな　汗　秋　月
汗かいて　生きる　本能　乳を　吸う　芳　子
此の　汗に　親子　五人が　ぶら下り　春　雄
汗水が無駄になろうがなるまいが　恵二朗

佳

また汗を　明日へ　つなぐ　鍬　洗う　千　翁
汗を　ふく　仕種で　涙ふいて　おき　春　巳
汗がうれしい樹影は風のこもる　古　方
汗ばんだベッドを見舞うところ天　酔　夢
重役の　余技は　汗ばむ　頃に　やめ　代仕男

人

汗かいた銭が寝た子の手をころげ　砂　生
ぼろ儲け　他人の汗が　馬鹿に見え　旭　峯

地

聴診器　寝汗と　聞いて　持ち　直し　水　車

天

嘘云えぬ　性と　見抜いた　鼻の　汗

軸


橘　高　薫　風　著
句　集　「れもん」
定価　五　百　円（送料共）

浜田久米雄著
句集　「凡　人」
定価　三百円・送料七十円？

麻　生　路　郎　著
新川柳鑑賞
定価　二百五十円
送料　百二十円？

第百八十三回（新年度第十一回目）

大萬川柳

# 「腕」

入選発表

選者　清水白柳

投句総数　六百二十三句

入選　七十一句

オートメに年期の腕はほっとかれ　西宮　金魚

腕前は互角謙虚な黒を持ち　出雲　王紫

借衣裳腕を少しまげて行く　熊本　芳仙

腕組みを解いてくれたは冷えたお茶　篠山　与志

注射器に笑われそうな細い腕　岡山　秋月

腕組みのまま叱られてるのが笑い　西宮　千夏

敏腕といわれ汚職でけつまずき　堺　亜也

改札の波へ腕っぷし子をかばい　島根　芳子

献血の腕を白衣が撫でてくれ　笠岡　要次

道楽の方ばっかりに腕がたち　岡山　一声

ピッチャーの腕一塁へ出て着せる　奈良　凡茶

くろうとで通る腕持つ気楽な身　大阪　水客

腕の差をまざまざ見せた鉋屑　笠岡　白梅子

美しい過去追うている腕を組み　大阪　水京

腕もないくせに仕事がどうの安いのと　八尾　弥生

何よりもベビーはママの腕がよし　神戸　どんたく

恐わ恐わと腕をまくって待つ注射　山口　弘道

或るときは馬鹿になりきる腕の冴え　玉島　旭峯

余技という腕を世間は高く買い　玉島　千翁

片腕へ任かすに足りるほど鍛え　篠山　可住

ノースリープの腕は種痘を数えさせ　大阪　保夫

この腕も俺一代というのれん　笠岡　忠三

気まぐれな仕事いい腕持ちながら　倉吉　弘朗

好きなればこそぶたれてもすがる腕　堺　慶之助

妻だけがまだ信じない釣りの腕　大阪　春巣

腕のないわりに学歴立派なり　和歌山　木魚

腕前を聞かされてから鮎もらい　泉北　好郎

腕買うてその学歴にこだわらず　高槻　静馬

腕を見込んだ職人でよく叱り　岸和田　きさ子

思い出に一度は組んでみたい腕　宝塚　無聖

スタイルに惚れた婿だが腕も出来　大阪　滋雀

啄木じゃないけどじっと腕を見る　大阪　没食子

腕よりも出た学校でつく格差　大阪　圭井堂

腕撫して補欠力んだだけですみ　堺　巴パスし

腕だめしのつもりの入試にパスし　香川　酔夢

腕組みをして老妻の愚痴と居り　香川　夢

細腕で医博にしたい夢に賭け　岡山　七面山

腕を買われて苦情処理係長　大阪　野迷路

愛妻の腕に酔体支えられ　岡山　十九平

腕前も知らず挑んだ碁に座る　大阪　竹荘

腕だめしやおら左右の指を折り　岡山　言論の府

言論の府で腕力がものをいい　富田林　美房

## 八月の句会

**たけはら川柳会**

時　六日（土）十九時

題　祭・金魚・墓三句

近詠五句

所　竹原町田中　静水居

**南海川柳会**

時　十八日（木）

題　冷房車・蚊・にせ

所　ナンバ高架下新和クラブ

返答に窮してボスが腕を組み　加賀　光郎

その腕がない修繕に汗をかき　大阪　阿茶

腕組みはくずさず思案まとまらず　大阪　文身

文身の腕が水撒く遠まわり　石川　宗太郎

腕組んで歩調のあわぬハイヒール　大阪　柳志

全盛の腕おとろえて審査員　大阪　梅里

腕だけで食えた昔をなつかしみ　大阪　竹荘

腕組めば同志離せば委員長　大阪　美房

いい腕をにぎらす酒を叱られる　富田林

終盤の棋譜へ名人腕を組み

つつましい腕仕立ものいたします

添いとげてからも頼母し腕に惚れ

うたた寝の腕ひっぱって起される

薄情な男に過ぎた腕を持ち

職人でとおした太さの違う腕　玉島　旭峯
献血の腕は静かに託すのみ　二　梅里
腕角力勝手の違う子の力　三　柳志
刑務所を出てから腕がまたあがり　四　吸江
五客　大阪　阿茶
さりげなく鳴る腕組んで待つ代打　岡山　文平
そろばんが出来て着物の縫えぬ腕　門真　鉄児
腕組みが解けず気まずい善後策　篠山　与志
腕組ゝ末っ子おんなじように組み　大阪　文秋
俳せを人に見せない腕を組み　五　好郎
人ノ句　六　清人
腕組んで笑う策士の歯を見せず　七　可住
地ノ句　大阪　文秋
片腕と言われ汚職に連座する　八　阿茶
天ノ句　高槻　静馬
腕自慢ひとつ職場に落ちつかず　九　静馬
選者吟　一〇　木魚
添乳する妻の片手の置きどころ　一一　文秋
☆　一二　万竿
大萬川柳ベストテン　一三　恵二朗
（七月現在）　一四　没食子
一水客　三七、五　大阪　一五　痴亭

二五、五　大阪　一七　宗太郎　一三、五　石川
二五、〇　大阪　一八　凡茶　一三、五　奈良
二一、一〇　南河内　一九　きさ子　一三、〇　岸和田
二〇、五　富田林　二〇　桃里　一三、五　笠岡
一九、五　泉北　以下略
一七、五　布施
一六、五　堺山
一六、〇　大阪
一五、〇　高槻
一五、〇　和歌山
一四、五　大阪
一四、五　松原
一四、五　児島
一四、五　大阪
一四、〇　大阪

次きの兼題「ダブル」　五句以内
締切　八月二十五日
発表　九月二十日
九月の兼題「マーク」　五句以内
締切　九月二十五日
発表　十月二十日
投句先　大阪市阿倍野区松崎町
三ノ十
大萬川柳会

## 新同人紹介

森本良夫
―愛論・竹荘推薦

佐藤甘草
―愛論・草右推薦

桝本蕗児
―愛論・史葉推薦

竹本素空
―半休・生々庵推薦

森田布堂
―雄々・弘朗推薦

藤本磯山
―弘朗・一三夫推薦

大工睦夫
―徹也・一三夫推薦

★前号の同人名簿へ松本忠三氏を追加

# ☆柳界展望☆

駒田梅子女史と堀口塊人氏が慶沢園池畔散策中を。
（薫風撮影）

（橋高薫風担当）

葉書手紙のうち十通ばかりのうちにも、「息をつくひまもありません。」という言葉が随所に出て来て、路郎先生晩年のご多忙を偲ばせるものがあった。

▼第九回近県川柳大会たけはら創立十周年大会は九月四日午前九時から竹原郵便局前森川邸で開催、兼題、無茶・青春・自炊・だしぬけ・国道・二役・偽・峠・好意、各題二句、投句は巾四糎長さ二十一糎の句箋に裏に雅号を明記、百円封入の上、広島県竹原市竹原町田中山内静水宛。

▼平安川柳社主催の夏をたのしむ会は、八月二十日（土）午後八時から二十一日午前七時まで、恒例の嵐山虚空蔵山で開催される。

▼第十回全国鉄川柳人連盟大会は七月十六日十七日山形県上ノ山温泉よねや旅館で開催。席題選者に辻白溪子、雑詠選者に山内静水の両同人が出席予定されている。

▼住吉貞康氏（会津若松市）は趣味のグループで雑草の採集研究を楽しんでおられるが、この程、生物同好会誌の別刷、「食つかじり集」を刊行、川柳にも触れて大いに川柳のPRをされた。

▼松尾馬奮一回忌法要川柳句会。期日、九月二十三日午前十時から。会場、三戸町「西村」会費、五百円。昼食、馬奮句集、懇親会共宿題、各三句吐、投句締切八月二十日（用紙B5判）「うらおもて」三太郎先生選「看板」周魚先生選「有難味」紋太先生選「毒舌」朝太郎先生選「生そば」平介謝選、席題は五題。投句先、青森県三戸郡三戸町、坂本雨山宛（投句のみは百円同封、発表誌呈。）主催三戸川柳吟社。

▼岸本水府遺墨展示頒布会が八月一日から七日まで、大阪梅田阪急百貨店六階美術部特別陳列室で開催。貴重な肉筆水府作品四十点が入手できる好機である。

▼直原玉青氏（守口市）本誌の表紙でおなじみの大家だが、路郎忌川柳大会にご出席のおたよりのなかに、「一徹の人であつたと惜しがられ」「抽象画などざらにあり雲の上」の句を寄せられた。

▼鷹巣一子さん（東京都）から、「路郎先生の一周忌が近くなりました。梅雨は嫌な時期です。噬三味もこの頃には腕をさすりさすり原稿を書いていました。」

▼清水米花氏（東京都）は病後のため意に委せず路郎忌川柳大会には欠席の止むなきご様子ながら、盛会を心から念じ上げているとの書信を拝受した。

▼河相すゝむ氏（西宮市）は入社試験の責任者として或は出張で、下関、東京と相変らず多忙のご様子。

▼若柳潮花氏（高槻市）は日舞出演や稽古の多忙なうちから、仲人もし、昨年亡

▼川柳塔社主催「路郎忌川柳大会」が七月十日午前十時から大阪慶沢園で開かれ各地から多数のご出席で盛会にしていただき大会委員一同厚く御礼申し上げます

▼宇和川木耳氏（布施市）へ石原青竜刀氏が寄せられた文面に「七月十日の路郎忌への参会の勧誘多謝、身辺その意に任かせず下阪の事は望むべくもありませんがよろしく御鳳声下さい」と。このように社外からもご協力たまわつているのである。

▼昭和四十年度第八回花童子賞は長野県の田中蛙声氏が受賞された。「正直に生きよう月がまんまるい」

▼ふあうすと川柳社は七月一日から新機構を発足させ会長椙元紋太、主幹鈴木九葉、理事三条東洋樹、房川素生、総務部長藤木主税、事業部長増井不二也と担当部門を強化した。

▼川柳と俳句研究誌「かほる」は六月二十五日第四、五合併号を発行したが、麻生路郎書簡集(1)を掲載、同誌主宰の阿部佐保蘭氏への

はげぬ・かぶれぬ白髪染
男まえ理容
環状線寺田町駅裏一丁南

くなられた岡山県の池上知恵美さんの愛嬢、西川都さんが川柳をはじめられると「近作柳樽」へ投句をすすめ岐阜の大谷月都氏へ「川柳塔」への出句に、ハツパをかけるなど、かつての手八丁、口八丁を再現されている。

▼田村藤波氏（岡山県）は五月二十五日、美作町文化協会の吟行、史跡巡りに参加して、三星城趾から笠懸の森などへ清遊、平賀元義の、「夏の日は道行く人も憩ふなり木蔭涼しき笠懸の森」の歌碑の前で後醍醐帝が休まれた往時を偲ばれた

▼本多柳志氏（大阪市）は六月四日日本ラインを下り大山城に登つて、木曽川の新緑を観賞された。「木曽川のしぶきにぬれて嬉しがり」

▼藤本礎山氏（鳥取市）は身体障害者援助のため、八歩、日満、茗人、法泉子氏らと色紙短冊展示即売会で活躍されている。氏は不二食品の社長であり、元海軍機関大佐である。

▼戸倉普天氏（兵庫県）は阪大石橋分院で六月二十六日逝去、二十九日本宅で告別式をされた。なお氏は川柳初代理事長として活躍され、そのほか郷土史の編さんなど文筆にすぐれた人であつた。七十八歳のご高齢謹悼。

▼現代川柳系の雑誌を統合して「川柳ジヤーナル」が静岡市豊原町五五・小泉十支尾氏方から発行。編集責任に河野春三氏。創刊九月号は八月二十日発行とのこと。

▼竹内圭三氏（池田市）の母堂が六月十五日糖尿病のため逝去された。享年六十一才、謹んで冥福をお祈り申し上げる。

▼河相すゝむ氏（西宮市）と薫風は七月三日午後、椙元紋太先生をお見舞いして路郎忌川柳大会へのご協力にお礼を申し上げた。

▼小汀茂夫、海士天樹共著句集「双碧」は、「ふあうすと」作風の一つの色を示しているようだ。番傘でも川柳塔でもない句風を味わうことが出来る。「銀河濃く男の決意南向く　茂夫」「靴の裏ときに山土踏みたくて　天樹」

▼小畠無壁氏（宝塚市）からのおたより「九日が亡妻の三回忌ですが寺院の都合で十日に営なむことになり、小西無鬼氏と一緒に路郎忌川柳大会へ出席するつもりでしたのに残念」と。

▼岡田彰男氏（善通寺市）は岡田拳法と改号。

▼呉柳会（呉市）創立十周年記念に句集「あゆみ」（非売品）が発行された。前掛にとんと無邪気のぬけぬ嫁・甦光など、B版百四十ページ。発行所・呉市本通九の四四・呉柳会。なお記念句会は百四名の盛会。

▼藤原秋月氏（岡山県）は農業協同組合の米増産標語に一位入賞され、川柳も佳句を増産したいと。

▼谷沢好祐氏（大阪府）の本誌五月発表の川柳塔〝たまのネクタイへ女房の目が光り〟が大阪新夕刊新聞に写真入りで発表された。毎土曜日にページ五分の一の大きさで発表され、好郎氏釣月氏とつづいている。

▼大塚健爾句集「うしほ」和紙一八〇ページ、編集人高木夢二郎、頒価三百円。発行所、横浜市神奈川区栗田田谷四一、柳樽寺川柳会

▼橋本緑雨氏（大阪市）は呆性結膜炎高血圧動脈硬圧で数年間医師にかかりずめの由。アベノのバスの乗り場でたおれ警官や待合客に助けられて帰宅されたこともあつたとのことで、大会不参加を残念がつておられる。

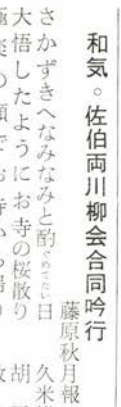
▼奥谷弘朗氏（倉吉市）も病気にたおれ大会不参加を残念ですと「路郎忌へ柳魂なだめて床に臥す　弘朗」

▼大山雅城氏（加賀市）は大聖寺法ケ坊から福井市幾久町九の一へ転居。

▼不二田一三夫氏（大阪市）は六月十一日から三日間秋田実先生ほか漫才作家くらぶの諸氏と高知へ旅行されたが同地の川柳人に会う時間のなかつたことが残念だつたと。

▼小倉へとち氏（神戸市）は昨年十二月一日突然発病一夜にして半身不随になられご療養中であるが、川柳塔同人作品（六月号）一三八名のうち知つている作家は僅か二十八名に過ぎずと八十二歳の老川柳家は霞乃先生のご健筆にも慶祝の意を表されたおたよりがあつた。

▼本社六月句会で初出席ながら堂々天位二句というスゴイ人があらわれた。尼崎市の岡本昭三氏である。なお「新型が出て先取りを妻が悔い」と「復線になつて故郷も電化され」の二句も同氏の作と訂正します。



▼原稿用紙にペン書き。文字は楷書。締切は25日着便。書式は発表誌のように。
金井文秋担当

## 和気。佐伯両川柳会合同吟行

藤原秋月報

さかずきへなみなみと酌がされた日　久米雄
大悟したようにお寺の桜散り　胡風
極楽の顔でお寺から帰り　政己
弱点を握って部下の変りよう　不朽
学校が変る栄転喜こばず　白水
知らぬ間に寺へ気が向く年令になり　三六
退院の別離を惜しむ車椅子　知水
察してか屠牛花野に足重し　楽水
地下足袋と生きて老後は二人きり　旅舟
切ったらと思った柿の木芽をふいた　宗義
由緒ある寺でも世にはさからえず　恵雨
木の芽あえ故郷の母を想い出す　春雨
さかずきを手で制しつつ口で受け　淡水
下賜された孟家宝の座を占める　文平
一間ぎり寺に千畳が遊んで居　藤花
ようしゃなく花の吹雪の尼の寺　繁子
目をそむけまた目をもどす足の線　凡石
盃が残した山の赤い肌　艸平
盃は笑わせ泣かせ怒らせる　清子
スカートはパリーを真似て大根足　緑風
足遅々と人生永き坂と知る　真帆
静けさをほめれど寺へ嫁に来ず　誠香
想い出が足伸ばさせた一人旅　左馬
芸の道馬の足にもなって生き　阿喜良
寺ばかり歩いて京の陽が沈み　曙花
ご先祖の年忌寺から教えられ　静水
長足を投げて子供またおどけ　正州
本堂へ悟りをひらく気で座り　芳月
寺参り心の痛手香に乗せ　正美
もやもやを盃素直に聞いてやり　正

## 小野田川柳会

国弘半休報

郷土の父肴は孫にやって飲み　素空
ハイキング野良で肴をつつきあい　つとむ
酒肴出せば和尚もいける口　六花
亡き母の好きな最中でする供養　素道
現金が最中の下に有る汚職　羊歳
物置きに子がこっそりと飼う兎　かすみ
ホステスになって学資を送る姉　千保
ホステスの返事いかにもなびきそう　花仙
ホステスを加えて記念の写真撮り　涼水
母と言い夫をかばう力あり　純昌
助産婦に母となる日を予告され　霞
あかぎれの母でもやはり世界一　新雪
母の日をすれば洗濯物たまり　半休

## 南大阪川柳会

金井文秋報

ご神燈のかげで寄附帖ひろげて見　梅里
飛ばんようになってトンボは捨てられ　静馬
イメージを追うて世界の旅にたち　双楽
呼んどいてそうめんだけの夏ようり　柳志
友達をみなライバルにさせるママ　清人
飛ぶように売れて未練な店じまい　文秋
イメージと違う税吏に丸められ　滋雀
フリーハンド何やしらんが絵になった　古方
視野のかぎりを海猫が飛ぶ旅情　水客
売り切れたところで相場が上を向き　一舟
売地広告切り抜きたまっただけのこと　好郎
切り抜きの美人の中でごろ寝する　恭太
教育ママ此の子にかける明日があり　金三
幼稚園のうちからママのスケジュール　柳宏子
負けずぎらいの顔さ教育ママは来る　竹荘
切り抜きは癌症状の十条　痴亭
スカタンを叩いて飛んだ針のあと　白柳
イメージは一筋なわでいかねば奴　千楮
イメージを抱いていつかは逢えるとも　凡子
金策へ飛ぶピラさえも札に見え　あいき
夏まつり花火も太鼓の音に消え　万里
売り切れで明日は少々値を上げる　八郎
売り切れの札があくびをしてはった　凡九郎
切り抜いた梅のつけ方今年も見　千万子
イメージにぴったり土器が複元し　章雅
恐妻家イメージ通りの妻をもち　金魚

## 玉造川柳会（大阪市）

西出一栄報

三々五々都塵をつけて来た人出　凡九郎
サボテンのトゲに似合わぬ花を咲　あいき
毛虫連想してサボテンの園を出る　梅里
無精者結局サボテンだけ育ち　好郎
年甲斐もなくはしゃいでる旅前夜　金三
はしゃぐにまかせ襖は穴だらけ　双楽
はしゃぐにも限度お互いさまに歳　操子
修学旅行はしゃいで夜が眠られず　六竜子
冬の月峰に昇ってなお寒く　寿美司
峰伝いバーブ佐竹の歌も出る　静歩
降りてきた峰は墨絵になって昏れ　きさ子
峰見えて舟足軽き大漁旗　静馬
お鉢廻り硫黄の匂い鼻をつく　章雅
靴ずれの薬も峰の茶屋で売り　柳太
峰の家ふもとに郵便受をおき　義介
レジャーホテル峰も緑も消えて建ち　滋雀
鉢植にいいなと思う峰の松　白柳

腹痛へ臨時富山の置きぐすり　一栄
腹痛へ祖母はコンニャクあたためる　句念坊
腹痛と云えば食い過ぎだと云われ　井平
腹痛は何を食べたか考える　雀蹄子
下積みの苦労を知らね七光り　凡子
模造でもよく光るのが欲しい指　中性尼
女一人生きるに世間の目が光り　痴亭
光線のいたすら波紋生きている　柳宏子
シャッターへ眼鏡は少し横を向き　文秋
さすらいの明日の光をまだ信じ　小松園
嬉しい時の涙は光るもの　水客

## 岸和田川柳会　高橋操子報

ハイウェイ運転手だけ無表情　客遊子
薬灰のねくみへ母を残して来　垣水
無為無策雨の日曜ごろ寝する　水客
ごろ寝して一級旅館の夢を見る
ままごとのごろ寝小さく横になり
ルンペンのごろ寝の背の人通り
目にしみる青さへうまい空気吸う
花束がしずかにゆれる青い海
青々と若い尼僧の孤独感
生意気が己が心にきずを付け
口だけは一人前に楯をつき
生意気に吹かすタバコの煙むにな
生意気な言葉もうれしい満二才

## 大鉄川柳会（大阪市）　辻白溪子報

割り込んでかけるお尻を睨みつけ　静二
意見は意見として二人は親友　一求
古木一本古都の名残り見てあきず　たつみ
聞こえない筈が茶の間で咳をする　永断
お茶の間へテレビの暴力遠慮せず　ただし
嫁がきて茶の間を蛍光燈にかえ　白溪子
枯れてなおガイドの口に花咲かせ　求女
意見素直に聞き馬鹿だとも言われ　季賛
茶の間から僕の悪口聞こえてき　緑雨
口とがる孫の意見にフト負ける　春巣
意見しに来たとは言わず靴を穿く　凡々

## 交通局句会（大阪市）　児島与呂志報

上り湯によいヒップだと眺められ　鉄舟
人はだて脳波クレペリンだとテスト　酔升
漫画だけ読めば立ち読み用が済み　正則
漫画なら汗が飛んでるペタルふむ　孤舟
世話役は火葬の許可もとりにゆき　天平
べんちゃらも上手に使う歳になり　雅万
べんちゃらが虫の居処変えちまい　鉄児
べんちゃらなどいらぬ素直な君でも　漫多郎
御飯より漫画の時間が気にかかり　翠芳
パパ迄が漫画漫画へママのヒス　茶々坊
大臣も己れの漫画見た苦笑　ゴーゴー
庶民こそ楽しさいっぱいサザエさん　我勝
漫画見ていて一駅乗り過し　季賛
許可もらうあの手この手の泣き落し　喜久子
危険事済んだ後から許可願　みのる
べんちゃらの一つも云えね律儀者　言也
Sカーブ補装道路へ風かおる　淡舟
ふるさとの道も変りしなつかしき　一乃字
道端の石はブームに乗りおくれ　一歩
単調な一とすじ道をペタル踏む　雅巣
どろんこの道郊外と云う暮し　きみを
夕食へ今日も家族の無事な顔　与呂志
夕食はいつも一と品生野菜
べんちゃらも言えね男に有る手腕
漫画見て頑固じいさん苦笑い
庭石の苔踏みつけたいほどみどり

## どんぐり川柳会（大阪市）川村好郎報

父頑として一番風呂をゆずらず　集一
たよりない夫の風呂のぬるいこと　雄峯
宴会で唄えば風呂の声ならず　吸江
都々逸が自慢で風呂でのぼせてる　太庸
父となり風呂子を抱く手のふるえ　岳太
酔うた客やっと帰えしてしまい風呂　生長
旅の風呂同じ埃の友と入り　章子
ガス水道風呂あり雨に弱い家　草春
赤ちゃんの声が澄んでる風呂の窓　一人
湯の中で明日を生きる思案する　雪男
君だけは君だけはとの当てはずれ　ひとみ
デパートも暖冬異変あてはずれ　喜風
当てはずれ小石を一つ蹴っ飛ばし　のん子
片道を承知の上で出すレター　梅里
指定席彼女が来ずに弟来る　一峯
子を風呂へ入れる時間にまで帰えろ　白柳
名曲が終る拍手に目をさまし　好郎

## ウイロー社（ハワイ）　築山快夢起報

表情は分らね暗へ荒い声　三石
古狸彼女の表情見逃さず　泉水
眼表情よくもあんなに変えたこと　暁舟
彼女ただ柳のように揺れている　峰円
老妻は表情を見て燗をつけ　あき坊
口笛へ娘の顔の変りよう　雪女
鏡台へ表情写して見る若さ　万里歩
あの表情まんざら厭でもなさそうな　快夢起
表情と別な心の底が見え　内海
戦況を聞くその時の無表情　麗女
表情も見せてやりたい電話口　拝山
表情にみな酔わされた審査員　紅茶
えらそうに口では云えど色に出し　紅溪
表情も変えず高利を貸してくれ　浅太
表情に出さねどあせる嫁き遅れ　カロ女
どの顔も同じ表情物価高　柳葉
エス子

## まるべに川柳会（大阪市）　川村好郎報

ふられたと思いたくない待ちぼうけ　巴香
五線譜も読めず人気は別のもの　瓢太
風呂敷に紐たしてまで欲つつみ　泉睦
風呂敷が一人前に席を取り　美幸
待ちぼうけ汗拭く顔におこられず　星斗
伝言板もう余白なし待ちぼうけ　睦子
風呂敷の定紋デンと結納来る　好郎

## どんぐり川柳会（羽曳野市）　川村好郎報

じれったい恋仲今日もベンチに居　白扇
お互の初恋話す夜は静か　功雄
裏切った夜の鏡を見る恐さ　芙蓉
貧しくも心は鏡のような母　於千
アルバムの色と同じの古き恋　若舟
お見合いの話があると打診する　昭人
春らんまん鏡を抜いて飲まんかな　史好
幕合いも忘れずのどくコンパクト　重夫
人の目を意識に入れた窓鏡　石秋
鏡など見るひまもなし子沢山　文代
水鏡月と二つの影うつす　寿美
三面鏡好きと云われた顔なおし　めぐみ
失恋も回を重ねてゴールイン　寸歩
生涯に秘めておきたい恋もあり　早霧
胸に秘めたほのかな恋を母は知り　マサエ
夜の蝶真実の恋してみたく　直己
せめてものこの恋だけはと年かく　芳秋
恐妻の片鱗もなし過去の恋　鬼遊
思う事口には出せず恋心　久郎
恋人を連れてくる娘に落ちつけず　利白
恋文を書いて今知る字のまずさ　玉水
いたい程踏まれて見れば美人なり　一八
美人の勧誘員で断われず　一歩
美人への抵抗膝上十センチ　静代

養老院あけ放しの恋笑い合い　好郎

## むらくも句会（島根県）　藤井明朗報

この健康そえて献血して帰り　一郎
危険水位合羽でいどむ雨の土手　正朗
不安なく夫婦で献血して戻り　明朗
生命の尊さへ献血ためらわず　白汀
献血の宣伝たらぬ赤十字　鶏生
下校の子傘くるくると雨の土手　昌
降る雨に土手の葉桜艶を増し　清泉
雨の土手虹くっきりと浮かんで来　芳子
献血に脈つながっているいのち　澄水
献血を終えて心のすがすがし　加代
退屈がついに良縁まとめさせ　孝華
献血車かすかな不安押しのける　信夫
病床で献血の友に励げまされ　英子
退屈な講義あくびをかみしめる　政吉
献血へ自衛隊員のたくましく　敏明

## 高知川柳社（高知市）　川竹松風報

月あかりおぼろに佇った影二つ　呑洋
影長く引いて農夫の早い朝　羅春
影一つ残して別れのベルは鳴り　柳水
影の声聞いて舞台の子が踊り　文子
母親も真剣大学受験場　句念坊
母の乳房の倖せさぐりあて　伊津志
メーデーへ親子鉢巻して出かけ　窓花
争えぬ血おんなじ様に禿げてくる　松風
親娘共上座にすわる嬉しい日　松月
何事も云えて親子の灯が明い　さだ子
山峡の美田も親の代限り　天花
六十も過ぎると夫婦らしくなり　紅雨
木魚よりピアノで生活す保育寺　勝子
折伏へ無神論者としての意地　一人
くちびるを許したまでを星は知り　舞子

## あすなろ川柳会（大阪市）

紅花緒素足に白き雨上り　諄一
汽車の窓一諸に開けてからの仲　慶之助
だれ気味課長パンチを利かしとり　百酒
もの腰も静かに来れば金のこと　弓彦
まだ化粧してる静けさ気にかかり　ゆきを
年甲斐もなく抜かれたら抜かれし　福郎
嫉妬もう限界別れる気の微笑　好郎
ブランコに上衣わすれたまま帰り　素郎
借りものと知らず上着の名で呼ばれ　梅里

## 富柳会（富田林市）　阿部柳太報

市場籠さげてもう一度見る鏡　吸江
寝不足の化粧がめつくぜにを貯め　きはち
買うて見る富士子が使う化粧水　美代
御近所の噂を化粧背に受け　吉太郎
後悔の今朝はさえない口の紅　花楮
嫁ぐ日の化粧をまかす目をとじる　美房
病んでなお女の哀しコンパクト　六竜子
わさび漬買わずに帰える新幹線　好郎
新幹線を利用宿泊費が出ない　白柳
汚点あってこそ先生の人間味　紅月
布のシミ濯げば落ちもするけれど　八郎

## 関学川柳会

もうすぐだ疲れ吹き飛ぶ山の風　鶏石
郊外の風送りますとクラー屋　隆策
風なくて腹がへったかこいのぼり　彦
夕暮に独り寂しく星を見る　義正
週刊誌スターとともにもうけてる　多家持
独身のスターにうわさ立ちやすし　柳恵
笑顔みずこのスターにも引く目あり　仙葉菜
スキャンダル利用とまるスターの座　孚彦
スター誕生一人のスターが消えゆく　舟遊

カラーで撮りたい五月の風が吹いている　辻圭水報

## 南海川柳会（大阪市）

厄年へ手相を見せる気にもなり　和郎
失恋に十九の厄を信じきり　貴山
負けん気の教育ママがつく吐息　きはち
負けんを出して老人又寝込み　句念坊
負けん気が女社長の座を保ち　宏子
売れっ子の一言記者を怒らせる　雄声
脱線の事故へ素人カメラマン　専翁
脱線もローカル線は隅の記事　圭水

## 岡鉄川柳会（岡山県）

低気圧一人二人と席をたち　佐加恵
おねだりを明日にのばす低気圧　春江
低気圧島を見に来て島がなし　文平
二号には余程の短気も機嫌とり　太郎
漢法の効めへ気短か待ちきれず　秋月
短気だけ直せと言った母は逝く　峰路
すき腹へすうどん短気な音をたて　白水
言うだけを言うて早口息をつく　三平
早口のセリについついひっかかり　忙乃友
早口に長距離電話喋っとり　照路
早口に好きだと言って逃げてゆき　胡風
自転車をとめ駐在の話し好き　葵丘
出棺の涙しぼれるだけしぼり　久米雄
嫁ぐ娘の涙こっそり拭いてやり　哲郎
短気に慣れてこらえるこつを知り　戡嘉
早口にまるめこまれた気持がし　敏治

## かがみ川柳社（岡山県）

お開帳寺の由来も説く住持　清水
偽物と知らず由来を鼻にかけ　文女
由来ある鐘はつくのに銭がいり　竹青
油地蔵由来尊き黒光り　蛙浪
千羽鶴由来は知らず君へ折り　有子
雨宿り古き縁家と古老云う　稲平
軒下へ雨宿借れば犬が吠え　晴老
軒端の甍が語る興亡史　骨
風鈴が去年のままで軒に鳴り　古心
改心をしてから錆びたままのドス　秋月
身からでた錆に人生うずくまり　碧人
錆のある咽喉で祝いの膳を舞い　溪仙
銘柄はあなたまかせの株を買い　明美
宣伝の効果銘柄だけで売れ　雅子

## 明朝川柳会（大阪市）

田中多幸報

行楽も帯姿ではつかれ過ぎ　花田
お遍路で煩悩捨てた積りなり　濁水
心無く唄って上戸のだしにされ　一登
ラブシーンのベンチは老も道を曲げ　多幸
根性なく明日又明日とたいぎがり　柳生
根性の不足を自認し平で居る　弘生
辛抱した此の根性が実を結び　慈明
母の日に貰った傘を羨まれ　清江
傘さして畑仕事ははかどらず　久江
当らない予報に傘を持ち歩き　茶々坊
傘持たねば新調の服あわれなり　久子
一もうけ根性で失せて趣味小唄　富士
懸命に子宝守る後家根性　喜久
根性を植え付けられた親の顔　芳川
実力は五分で根性で引けを取り　源

## オーエスケー川柳会（大阪市）

大坂形水報

破れ傘喫茶店の外に置く　勝美
傘にはみ出た肩のみじめさ　広助
破傘洩らない方へまわすなり　幸太郎
相合傘はずむ話に濡れながら　真人
ようやくにめぐり会えたか我の傘　真彦
仕方なく代りの傘をもち帰り　健坊
印し傘持てば無銭で土産買え　神田
雨楽しママと相合幼稚園　専夢
梅雨時の夢は地球に傘が欲し　智也
雨だれを傘に受けてる子供達　忠一
忘れたらもう知りまえん傘おろし　有一
アーケードの切れ目半分開く傘　入仙
借りた傘次の雨迄忘れてる　一扇
ステージでテープ手にする夢を見る　豊則
新幹線別れのテープも使われず　重則
社長訓テープで支店廻りする　常夢
大臣が来て開通のテープ切る　形水
給料日ソロバンの音ころよい　雄元
一たす二わかっていても玉はじき　美露
初商い算盤持った手がふるえ　洋児
ソロバンは時代遅れの計算機　真彦
ソロバンの玉が一つでまとまらず　順三

☆おわび　「関谷吟行句会」と「たけはら川柳句会」を次号に。おわびいたします。

宴会・折詰・出張パーティ
大萬
阿倍野区松崎町
TEL (623) 5031・5032
南区畳屋町三ツ寺センター
TEL (211) 9184

## ― 常任理事会 ―

七月四日午後六時から第六回常任理事会が本社楼上で開かれた。

路郎忌川柳大会に手落ちはないか、と再確認することだつたが、またそれだけに十六名出席というレコードをつくつた。派手にやることではなく、意義あるようにというのが、こんどの大会なので、全員がどんな役でも引きうけるという熱の入れかただつた。

十月の創刊一周年記念句会の席上で、いよいよ待望の「路郎賞」の受賞者が決定するのだが、その選出方法は、本社の雑詠選者全員と白柳氏がその任にあたることは六月号でお知らせしたとおりである。

各選者が一人十句厳選しそれを九月四日の理事会席上で決定するのである。たしかに難中の難であるが、これこそ川柳塔の句であると、誇れるものでなければならない。選者諸氏にはアタマの痛いことである。同人諸氏も、最後のチャンスが九月号にあるので、全員ご投句で栄冠をさらつてください。九時三〇分閉会。

出席、白柳、薫風、生々庵、水客、圭井堂、静馬、梅里、好郎、すゝむ、恒明、柳宏子、多久志、形水、古方、いさむ、一三夫諸氏。

★

▼印刷所へ原稿を入れる日が来ているのにまだ編集部へ私の原稿をわたしていないので「九輪水煙」も書けない。編集に関することならどんな小さなことでもお気づきのところはお知らせください。皆さんのお声を待っております。

（清水白柳）

## 本社八月句会

日時　八月五日（金）午後六時
会場　自安寺（妙見さん）
　　市電千日前下車スグ北側
　　（電話211・1478番）

兼題
「パンチ」　柳話
「滝」　清水白柳
「手がかり」　本多柳志選
「歴史」　高橋操子選
　　八木摩天郎選
　　菊沢小松園選

席題　三題（題と選者は当日発表）各題三句
会費　百五十円

★投句だけの方は切手50円封入

★電話での投句や訂正はご遠慮願います

大阪市南区鰻谷仲之町20
川柳塔社
電話 大阪 (271) 3985番

9月の兼題　「計算器」「欠点」「ステレオ」「裏」

## ・募集・

### 十月号発表（8月15日締切）

川柳塔（10句）　中島生々庵選
近作柳樽（10句）　松江梅里選
課題吟（各題10句以内）
「手ぶら」　林野甦光選
「体験」　若林草右選
「垣」　国弘半休選

★原稿は四百字詰原稿用紙に六枚以内。文字は楷書で新かなづかいにしてください。

### 十一月号発表（9月15日締切）

川柳塔（10句）　中島生々庵選
近作柳樽（10句）　川村好郎選
課題吟（各題10句以内）
「勤労」　川竹松風選
「ピンセット」　内藤きさ子選
「聞き込み」　吉田水車選

★川柳塔の投句は本社同人に限ります。

★用紙はなるべく柳箋をご使用ください

料理も電話も 551 ここがいちばん
TEL.(641)551-2

広東料理
豚饅 蓬莱 焼売
大阪なんば
◆出張販売店◆
なんば高島屋店・心斎橋そごう店・梅田阪神百貨店
天満京阪ストアー・弁天阜頭港店・中之島サン・ストアー

★今月の市を回ってみて、まに新年号である。映画雑誌をやっているころ、ちょうどそろそろ月のお安さんに羽子板を持たせて表紙や口絵をこしらえたものだった。二月の寒中に水着スタイルの写真をとるのだから、どうしてもアタマがおかしくなる。

★雑誌がマンネリになってはいけないので皆さんのお知恵を拝借したいのですが、いいアイデアがあればお教えください。

★アイデアといえば、ぼくたちのグループが電通さんへまねれて、テレビやラジオのアイデアを買うとこわれたが、ナントいいものなら百万円出すには驚いた。まさはこんなアラワサはできないが、なにかいい企画はありませんか。

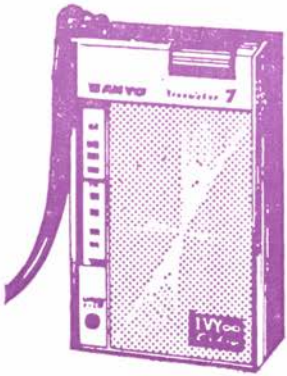
★前号は好評で売り切れました。「路郎百句」がきいたのです。度乃先生のおかげです。☆欲しいのは結構だが自分を見失うのはわびしい

・2DK・

GOLDEN
O.S.K
の紳士服
スマートで
着心地のよい
株式会社
オーエスケー

定価 百二十円（送料六円）
半年分 七百五十円（送料共）
一年分 千四百四十円（送料共）
昭和四十二年七月二十五日印刷
昭和四十二年八月一日発行
東京都千代田区三崎町二丁目二番地
中島蓬太郎
大阪市北区天満二丁目二番地
大盛印刷株式会社
東京都千代田区三崎町二丁目二番地
川柳塔社
振替東京一七一一一番
振替大阪一一一一一番

昭和四十一年一月九日　第三種郵便物認可
昭和四十一年七月二十五日　印刷
昭和四十一年八月一日発行（毎月一日発行）
川柳塔　八月号
定価　百二十円（送料六円）




〈カドニカ電池〉

永久電池内蔵

7C-615型（7石1バンド）
現金正価　5,400円
6回正価　5,670円

SANYO

サンヨーカドニカ

三洋電機株式会社

新発売！強化された肝臓保健薬

チオクタンS®

疲れ
肌あれ
酒・タバコに
〈のみすぎ〉〈すいすぎ〉

〈包装〉　45錠
100錠
300錠

フジサワ薬品